

始



特261
43



(一)沿革の概要	一頁	(四)産業	六〇
(2)地理	三	(1)農業	六〇
(3)地勢	三	(2)工業	六四
(4)面積	五	(3)商業	六〇
(5)人口	六	(4)漁業	六〇
(6)産物	七	(5)労働	六〇
(7)気候	九	(6)金融	七六
(7)交通運輸	一四	(五)教育	八〇
(8)通信	一八	(1)小学校	八〇
(三)歴史	二六	(2)青年学校	八六
(1)名勝古蹟	二六	(3)上級学校入学状況	八九
(2)伝説	三一	(六)社事兵事	九〇
(3)風俗	三七	兵事之部	九〇
		(1)帝口在郷軍人会高千村分会	九〇



高千村誌

一 沿革の概要

(1) 守護地頭時代

石花將監

地頭時代 海府一帯（小川 達者 姫津 狄 戸地 戸中 南片辺 北片辺
 石花 後尾 北川内 北立島 入川 千本 高下 田ノ浦 小野見 石名 小
 田 大倉 矢柄 関 五十浦 岩谷口 の貳拾四ヶ村）の地を領し、雑太本圃の
 庶流北佐渡の幕下なり。天正中越后の上杉氏に亡されしと伝へらる。
 或は古上杉景勝の佐渡へ攻め寄せたる際、中山峠迄行きしが、国仲の諸城陥り、
 戦の見込なれば引返し、相川山ノ上の總源寺に入り、同寺の僧となりしと
 居城陣地十六百餘坪、其の城址は大字石花の直背田圃中に在り。今尚一の土状
 をなす。起代青波を漂はす、夢畑と化し、四圍皆田地に閑寂せらる。雖も残礎旧濠依
 然たり、今字本間惣右エ門 本間喜平、等當時家老たりし家柄なりと。

(2) 佐渡三郡時代の高千村

現在の大字後尾と北河内との堺なる、桜川の南岸に雑太郡と加茂郡との境塚標柱
 ありしと云ふ。今は廢括して其の影を見ず。即ち後尾以南は雑太郡に北河内以

(2) 戦病歿者	九四	(1) 高千鉦山	一一二
(3) 廃兵	九八	(1) 鉦区	一一二
(4) 徴兵検査結果表	九八	(2) 沿革	一一二
(5) 勤功者	一〇〇	(3) 地質鉦床並鉦脈	一一二
神社及寺院之部	一〇三	(4) 探鉦開坑其他	一一二
(1) 神社	一〇三	(5) 産出量	一一二
(2) 寺院	一〇七	(6) 動力並に機械	一一二
(3) 記念碑	一一二	(7) 諸設備	一一二
(七) 官公署諸団体	一一三	(8) 従業員	一一九
(1) 官公署	一一三	(9) 建築物	一一九
(2) 諸団体	一一四	(10) 附帯事業	一一〇
(八) 自治	一一〇	(5) 其他	一一〇
(1) 厂代村長	一一〇	(1) 名勝指定地としての本村	一一〇
(2) 選挙の狀態	一一一	(2) 保健	一一一
(3) 納税狀態	一一一	(3) 娛樂	一一一
(4) 基本財産	一一一	正誤表	一一四

北の地は加茂郡に属せり

附記 明治廿九年十二月佐渡三郡を合して一とし佐渡郡と称するに至れり

(3) 佐渡三郡時代の行政区

各部落毎に戸麻あり 尚外海府村願より片辺迄を一小区とし小区願は外海府村小田にありて統轄されるたり

(4) 町村合併前の高千村

吾が村は元石名より北河内に至るハケ大字を高千村とし後尾より今の金泉村大字戸旭に至る六ヶ大字を北海村としたるものなりしが明治三十四年十月三十日を以て北海村は金泉高千の両村に合併されしなり 即ち戸旭中の二大字は金泉村に 南片辺北片辺石花後尾の四ヶ大字は高千村に編入合併することとせり

(5) 合併後の高千村

現在の高千村は南片辺より石名に至る十一ヶ大字よりなり三百九十五町六反の田地と八十二町の畑とあり平年作にありて米八千五百石を産し世帯数約九百二十一人人口約四千六百二十一人当り約一石八斗三升にて一年の需要を充たして尚約四千石の移出をなす余裕あり

地理

(1) 位置

本村は南西より北東に凡そ十二料に渡る地域に於て南西は金泉村に北東は外海府村に界し北西は日本海に於て南東は大佐渡山脈の分水界を境として加茂村吉井村金澤村の地に続き此の間約八料あり
本村十二の村落は海岸低地に南西より北東に長く在するものにして大字入川は本村の略々中央に位し高千尋常高等小学校も亦此所に在り小学校を基泉として位置を示さん

(2) 小学校の位置

東経 一三八度 一九分 一九秒

北緯 三八度 一〇分 五四秒

(3) 我口及世界に於ける緯度地方

(A) 日本に於ける主なる緯度地方

○ 東方 新潟縣の岩船より山形県荒砥町を横ざり仙台市の南方約八料の増田町に通ず

○ 西方 朝鮮全剛山南麓より載寧に通ず

(B) 世界に於ける緯度地方

○東方 仙台市の南増田町より太平洋に出て北米のサクラメント市を過ぎワシントン市に至る
○西方 朝鮮の載寧より天津の南方を通り寧夏を過ぎタクラマカン沙漠を横ざりアテネ市の北を通りシシリ島の北端メシナ港を経て地中海に出で葡萄牙のリスボン市の南方に至る

(1) 我口及世界に於ける主要経度地方

(A) 日本に於ける主要経度地方
○南方 高田市の東上田市の東を通り立科山を割り静岡市の西辺を通り焼津に至る
○北方 なし
(B) 世界に於ける主要経度地方
○南方 日本委任統治地中のヤップ島を通り濠太利の南方ポートオーガスタ及びパイリー市に通ず
○北方 アマンの東辺を過ぎシベリヤより北極海に至る

(二) 地域概観

北東 外海府村に境を接し
南西 金泉村と界す

南東 大佐渡山脈の分水界を以て境とし加茂村吉井村金澤村に接す
北西 荒波狂ふ日本海に望む

(2) 地勢

(イ) 起伏の狀態

佐渡の秀嶽金北山を主峰とする大佐渡山脈が南西より北東に連り其の山脈中には金剛山「九六〇米」檀特山「七八九米」等が聳え佐渡に於ける大山脈なりと雖も金北山を除くの外千米を越ゆるものなし
北西の日本海との間には三段又は二段の海岸段丘発達し其の最も低き処に高千村十二の村落は南西より北東に長く奥在するを見るべし 此の海に面せる村落の後方及び村落と村落との間及び川の両岸並に段丘上には才地も余す所なく田園のよく開拓せられあるを見るべし 高千の産米八千石は實に此の田園の賜である

(ロ) 河流

大佐渡山脈の分水嶺より流れ出づる水は横谷を作り海に注げども分水嶺の海岸に迫るの近きが故に急流にして水量多からず 近年炭材及び用材の濫伐の爲夏季には洪水して其の殆ど全部は海に注ぐものなし 高千村十二料の間川は其の數十余指を屈すれども僅かに其の數ふるに足るものは次の如くして入川を以て

最も大となす

石花川	六・六料	入川	七・五料	大谷川	五・四料
石名川	五・四料				
中ノ川					

此の川はその長さに於て他の川の半分にも及ばざれども傳説安寿の姫によつて名高く鹿の浦にあり

片辺鹿の浦中の水呑むな

毒が流れる日に三度

の民謡も実に此の川にかかるものなり

(イ) 地質

高千村地域内の地質を示さくに別紙の如し

(3) 面積

(1) 総面積 約六方里 官有地池沼道路河川等を含む

(2) 地目別面積

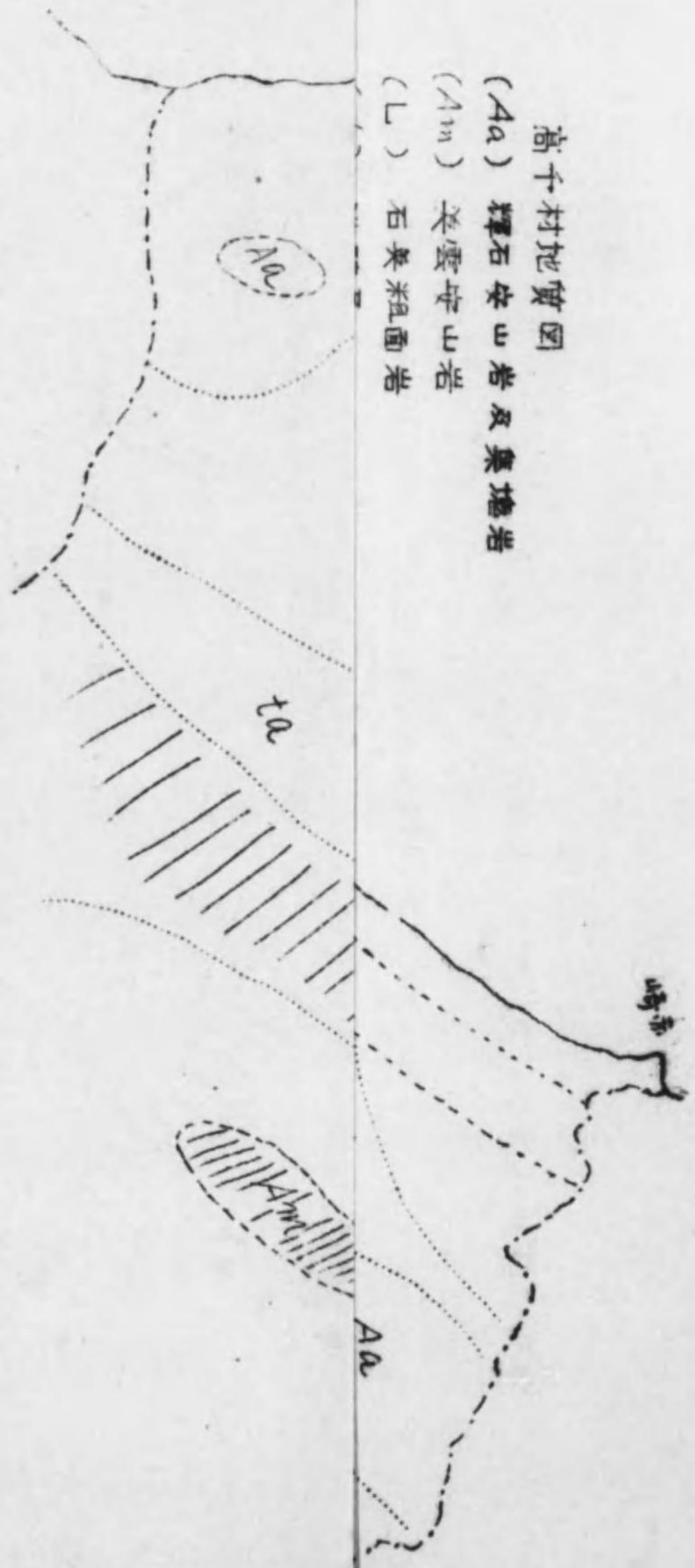
田	地	四百町歩	畑	地	八十七町歩	原野	百六十七町八反歩
山		八百十七町六反四畝三歩	雑	地	四町六反歩		
宅	地	九万三千三百十坪					

高千村地質図

(Aa) 輝石安山岩及集塊岩

(Am) 安山岩

(L) 石英粗面岩



の民謡も実に此の川にかかるものなり

(1) 地質

高千村地域内の地質を示さんに別紙の如し

(2) 面積

1) 総面積

約六方里

官有地池沼道路河川等を含む

2) 地目別面積

田地 四百町歩

畑地 八十七町歩

原野 百六十七町八反歩

山 八百十七町六反四畝三歩

雑地 四町六反歩

宅地 九万三千三百十九坪

高千村地質図

(Aa) 輝石安山岩及集塊岩

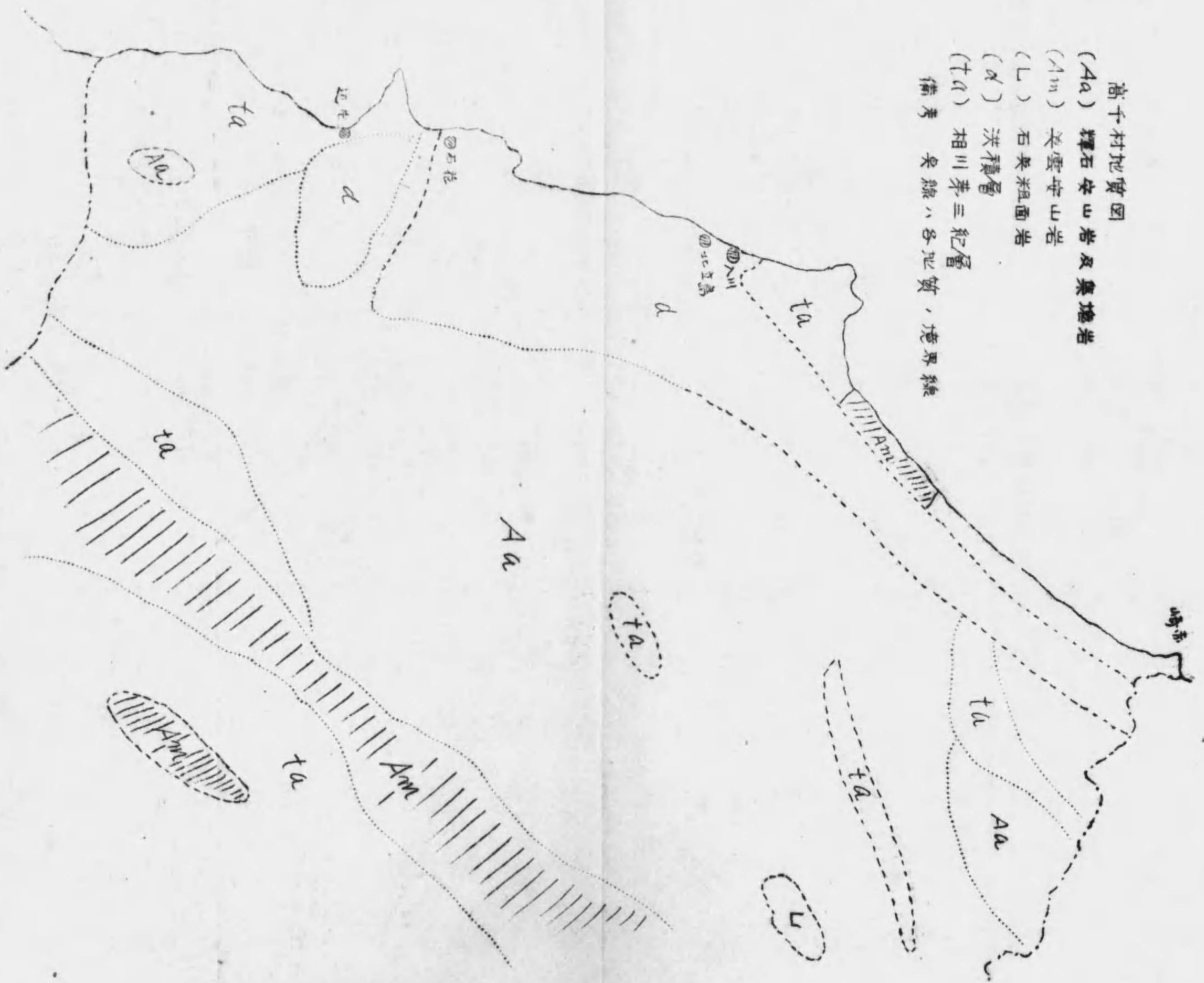
(Am) 安山守山岩

(L) 石英粗面岩

(d) 洪積層

(ta) 相川第三紀層

備考 泉線ハ各地質ノ境界線



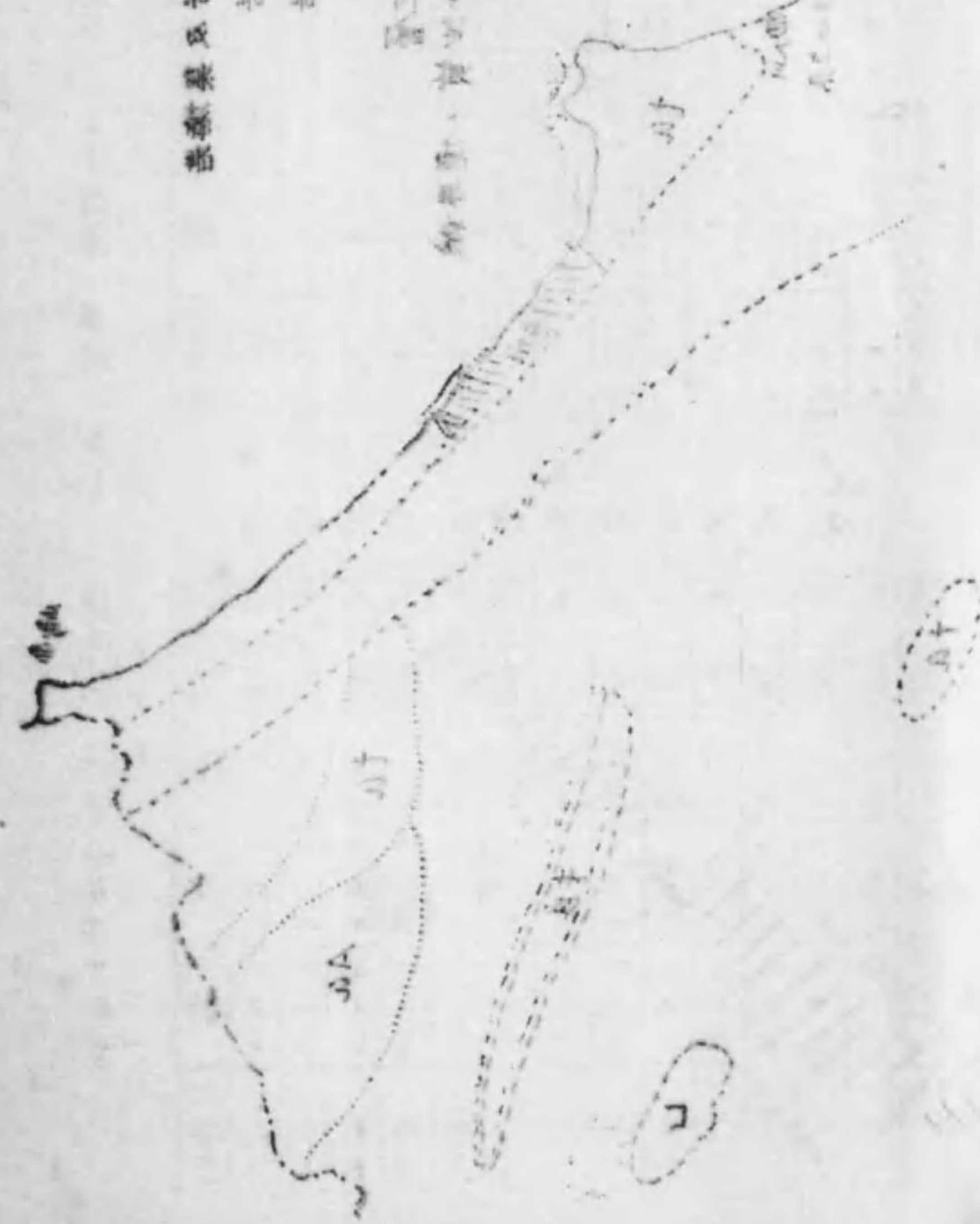
兵 務 査 査 調 査 年 五 和 昭 (4)

合 計	石 名	小 野 見	田 野 浦	高 下	千 本	鉦 山	入 川	北 立 島	北 川 内	後 尾	石 花	北 花 辺	南 片 辺	大 字 名	男	女	計	世 帯 数
二二四三	二五三	一三二	二二四	一七六	一三五	八四	二二九	一七七	一五六	一九〇	一五八	二一一	一一一	御料地縣有地	二二二	一三二	二五三	四八
二二七四	二一四	一一二	二八五	一八七	一三三	六六	二五四	一九一	一九四	二〇一	一六九	二二六	一一二	御料地	二二六	一三二	二五三	四八
四六一八	四六七	二五四	五〇九	三六三	二五六	一五〇	四九三	三六八	三五〇	三九一	三二七	四三七	二五三	本材になし	四三三	二五三	六八六	九三
九〇三	七三	四六	一〇三	七三	五九	三七	一〇〇	八〇	六七	六九	六五	八三	四八	縣有地	四八	一〇	五八	七

果 結 査 査 調 査 年 十 和 昭 (4)

合 計	石 名	小 野 見	田 野 浦	高 下	千 本	鉦 山	入 川	北 立 島	北 川 内	後 尾	石 花	北 花 辺	南 片 辺	大 字 名	男	女	計	世 帯 数
二二一七	二一六	一一二	二二七	一八八	一三五	六四	二七一	二〇七	一五九	一八八	一五〇	一九一	一一一	御料地	二一九	一三六	二五五	五二
二二九九	一九九	一〇三	二七七	一九六	一四八	四一	二八四	二一七	二〇三	二〇一	一七二	二二二	一一一	縣有地	二二二	一三六	二五五	五二
四六一六	四一五	二一五	五〇四	三八四	二七三	一五〇	五五五	四二二	三六二	三八九	三二二	四一三	二五三	本材になし	四一三	二五三	六六六	九一
九一八	七一	四四	一〇七	七六	五七	三〇	一一〇	八五	六八	七〇	六四	八五	五一	縣有地	五一	一〇	六一	七

(4) 御料地縣有地
 (5) 御料地
 (6) 縣有地
 (7) 縣有地
 (8) 縣有地
 (9) 縣有地
 (10) 縣有地
 (11) 縣有地
 (12) 縣有地
 (13) 縣有地
 (14) 縣有地
 (15) 縣有地
 (16) 縣有地
 (17) 縣有地
 (18) 縣有地
 (19) 縣有地
 (20) 縣有地
 (21) 縣有地
 (22) 縣有地
 (23) 縣有地
 (24) 縣有地
 (25) 縣有地
 (26) 縣有地
 (27) 縣有地
 (28) 縣有地
 (29) 縣有地
 (30) 縣有地
 (31) 縣有地
 (32) 縣有地
 (33) 縣有地
 (34) 縣有地
 (35) 縣有地
 (36) 縣有地
 (37) 縣有地
 (38) 縣有地
 (39) 縣有地
 (40) 縣有地
 (41) 縣有地
 (42) 縣有地
 (43) 縣有地
 (44) 縣有地
 (45) 縣有地
 (46) 縣有地
 (47) 縣有地
 (48) 縣有地
 (49) 縣有地
 (50) 縣有地
 (51) 縣有地
 (52) 縣有地
 (53) 縣有地
 (54) 縣有地
 (55) 縣有地
 (56) 縣有地
 (57) 縣有地
 (58) 縣有地
 (59) 縣有地
 (60) 縣有地
 (61) 縣有地
 (62) 縣有地
 (63) 縣有地
 (64) 縣有地
 (65) 縣有地
 (66) 縣有地
 (67) 縣有地
 (68) 縣有地
 (69) 縣有地
 (70) 縣有地
 (71) 縣有地
 (72) 縣有地
 (73) 縣有地
 (74) 縣有地
 (75) 縣有地
 (76) 縣有地
 (77) 縣有地
 (78) 縣有地
 (79) 縣有地
 (80) 縣有地
 (81) 縣有地
 (82) 縣有地
 (83) 縣有地
 (84) 縣有地
 (85) 縣有地
 (86) 縣有地
 (87) 縣有地
 (88) 縣有地
 (89) 縣有地
 (90) 縣有地
 (91) 縣有地
 (92) 縣有地
 (93) 縣有地
 (94) 縣有地
 (95) 縣有地
 (96) 縣有地
 (97) 縣有地
 (98) 縣有地
 (99) 縣有地
 (100) 縣有地



(6) 各字職業別戸数調

本材の生活状態より
 免て主業が何業なる
 かを決定するに困難
 なるものあり
 此等は其の他の樹
 木に加入せり

大字名	農	業高	業其	他	計
南片辺	四一	—	—	二	四四
北片辺	七六	—	—	三	八〇
石池	五八	—	—	三	六一
後尾	六一	—	—	四	六七
北川内	六一	—	—	五	六七
北立島	六一	—	—	五	七五
入川	七〇	—	—	二	九三
千本	五一	—	—	五	五七
高下	六一	—	—	〇	七三
北田野浦	九〇	—	—	一	九一
小野見	三六	—	—	四	四一
石名	五七	—	—	一	六八
合計	七二四	一八	八七	八二九	九

(5) 生物
 (1) 植物

侏羅紀の終りに現れたる被子植物は白亜紀の後半世には普く地球上に分布して殆ど現今と大差なき迄に発育したが第三紀末より気温は低下し第四紀の氷積世に至つては其の極度に達し氷河の影響は植物界に甚大のものであつた。佐渡は勿論本邦の気温も其の影響を被つた氷積世の後半より再び地温は高まり北半球の大半に広つた寒地植物は漸次北方に退き又は特別生態條件の所に止り今尚生育を続けつゝあるのである。況て沖積世の始めには本洲及北海道迄が暖帯に比すべき高温となつたが漸次回復して今日の如き状態に至つたのである。此の際北進した暖地植物は海岸線等特別の條件に適つた場所に残り現今尚生育を続けてゐるのである。此の場合には佐渡は特に日本海に入つた暖流の気候的影響も亦至大の關係をもたらしてゐるのである。かゝる兵より佐渡特には高千穂の植物景観は甚だ興味深く意義ある問題であるのであるが今固は余りな範圍にあたるをさけて分布上特に興味あるものの二三につき記してみたい。

昔く前にことばはることは自分の研究してゐる羊歯類以上のものでも陸上のものにのみ限りたい羊歯類以下のもので牧野博士をお迎へした節ニ三興味深きものがあつたのであるが研究する力なく海藻に至つては歯が立たず本頁が生ん

を海藻学者遠藤吉三郎博士が命名した。カイフモクすらも其の正体をつかめず
北大の山田教授より佐渡は海藻は面白いだらうと云はれた時一口もお答の出来
なかつたことは眞に汗顔の至りである。他日研究の出来た時発表したい。

(A) ヤマトグサ

大正七年に金泉村にて自分が発見した高千村では昭和六年五月入川字植口で最
初に自分が発見し其の後殆ど全村の山林地内に見受けた此の植物一科一属で発
見された自生地も極く少く世界的の珍草である。世界の自生地をあげて見ると
牧野博士が土佐で明治十七年に、其の右明治二十七年常陸で明治三十三年松村
博士が相模で自分が佐渡で其の右高野山のみである。

(B) キンポクラン

昭和八年七月牧野博士により命名された新種であるが東大理学部の或人の言に
よれば四国で数年前に命名されたものと同一のものではないかと云はれてゐる。

(C) ヒモカヅラ

本村の溪谷の岩石上に非常に多いものであるが本洲に於ては中部山岳地帯に余
り多くないもので分布上極めて面白いものである。

(D) ツリガネタケ

普通の草は上に伸び又生成が数年に亘るものは横に伸びるのであるがこれは毎

年下へのびるので面白い分布も極めて粗である。

(E) オサバグサ

分布が世界稀有のもので其の葉を見る時にはオサシダと區別が甚だ困難な物
である乳白色の四花瓣の花を咲かせた時誰しもしとやかさに驚くものである。

● 南のものが北に来たもの

(A) ヤブツバキ

俗に云ふツバキで栽培ツバキの原種である。

(B) タブノキ

一名イヌグサとも云ふ元来南洋台湾琉球九州四口等に自生する常緑喬木である
が本村にあるものは極めて貧弱なもので秋田縣では六七尺も囲むものがあるが
数寸位のものである。

(C) エノキ

本村ではエノミ又はエノミの木と称す台湾琉球九州四口本州南部に自生するも
のであるが極少数であるが北限は青森県にゆする。

(D) アカメグシハ

前者の如く南のものであるが本村の谷間には時々見受けるアカメと稱してゐる
新芽が著しく赤きによる。

(E) シラキ

本村には普通のものであり前者の如き地方が自生地である昔此の實より油を採り燈用にしたりと

(F) ビロウドシダ

台湾琉球九州四等には普通のものであるが本村では自分の採集した所をあげると石花川の中のせきの少し上流 入川の大垣附近 小野見川の小野見の一番上のせきかしろ等が普通のノキシノアをビロウド化したやうなものである

(G) ヒメツゲ

天然記念物として保護されやうとしてゐる保護されてから記す

●北のものが南に来たもの

(A) ハマハコベ

樺太千島北海道に生ずるものであるが本村の海岸には諸所にある

(B) ハマベンケイサウ

前者全様

(C) ゴエフマツ

樺太千島北海道等に生ずるが本村には鹿ノ浦五葉松平に大木あり

(D) キヤラボク

北海道では平地にあるものであるが一位の産地でありアイヌはオンコと云ふ本村ではトガと称してゐるが誤称である

(E) ハマナジ

ハマナスとも称し海浜に普通のもので南は勿論佐渡を越してゐるものである

(四) 動物

遠く地質時代に於て佐渡が越前と陸続きの時代に於ては本土全様の動物の分布を免たものである其等のものが佐渡各地の化石層に於て発見されてゐる一例をあげると沢根貝殻層に於ける爬虫類時代に地球を現在の人類以上に動物類に横行した デスモスナルスの歯や其の他新種の炭化石 加茂村に於ける グラビスター オリエンタリス の如き又西三川に於ける ミオギプシーナール其の他のもの或は外海府に於ける各種化石より見て過なきものであるが植物全境過去に於ける変化或は地軸の変化又は越前海峡を生じた大変動地殻の隆起沉降等により大変化を来し其等の時代に於て絶滅したるものは数限りなく又島となつてより早くより人類が住しそれによりて狩獵され絶滅したるものもあることを考へられる智能の割合に進化してゐる哺乳動物を考へて見るに本州のそれに比するに数の少きに驚くが細部に渡り研究したならば甚だ興味ある問題であると

思ふがそれと分類する力ないのを惜なく思ふのである例をあげて見るに高千村に産する鼠にしてもカウモリにしても何が居るのか全然見当がつかないのである。まして海産のものに至つては盲者全然である。最近に至つてブリ、マグロがとれ出したのも海流に關係があるか聞き数年の後に得たウニの枝々が普通に見るものと異つてゐるので九大の大島博士に鑑定を求めた時にオホアンプクと申され分布上極めて面白いものであると申されたが研究費の乏しさで次々と標品をお願ひすることが出来ず其の終となつてゐる又鳥類で最近天然記念物として保護された朱鷺も地球上ではアフリカの一部にかなりと我口の福井石川の一部に極少と我佐渡は勿論高千もその区域に入つてゐるが)に発見され保護区域に入つてゐる其の他下等動物のカタツムリの類で大妻興味あるサドギセル其の他のものがあるが他日研究出来てより発表することとする

(6) 気候

(イ) 初霜 晩霜

本地方は霜を見ること少くして年中教日を教ふるにすぎず初霜は概ね十月下旬にして晩霜は三月上旬頃なり

(ロ) 雨雪の状況

最近五ヶ年間の年別月別晴雨雪の百分比を求むれば左記の如くなるも本地方

の特徴としては道路に積雪量少くして雪の爲に縣道に自動車不通となるが如き事は極めて稀なりとす

● 年別百分比

年別	晴	雨	曇	雪
昭和七年	五二・一	二〇・〇	一八・八七	九・〇二
八年	五二・二	一五・一	二二・一	一〇・五
九年	四五・五	一七・七	二八・六五	八・一四
十年	四三・五	九・〇	三七・六五	九・八
十一年	四九・三	一三・三	二九・〇	八・三
平均	四八・五	一五・〇	二七・二五	九・一六

● 月別百分比

年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
昭和七年	四〇・〇	二四・一	四四・五	一七・六	三三・五	六四・五	二六・三	三三・五	六八・二	六一・五	五〇・〇	六三・三
八年	二二・三	三三・三	三三・七	六四・五	二二・三	六四・五	一六・六	二九・〇	四・五	三〇・〇	二〇・〇	三〇・〇
九年	二〇・〇	二〇・三	二二・五	一八・一	三三・四	二九・〇	二〇・〇	二二・九	一三・一	一四・二	二〇・〇	一六・六
十年	二〇・〇	二〇・三	二二・五	一八・一	三三・四	二九・〇	二〇・〇	二二・九	一三・一	一四・二	二〇・〇	一六・六
十一年	一六・六	一五・一	一七・六	二五・七	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三
平均	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三

月下旬より九月上旬にかけて本邦を襲ふ颱風は本村に於ては多く東風或は南東風の強烈なるものとなり爲に農作物の被害甚大なり一年の豊凶は実に初秋に於ける此の風に左右せらるる。古ふも通言にあらざしかも此の風強烈に吹きたる日は型の如く西南風となりて其の勢盛となり時に漁船の難破することあり。冬季は概ね西或は北西の風多く遠くシベリヤより日本海を渡りて寒気と雪をもちたりすものなり。

(7) 交通運輸

(1) 陸路

(A) 県道 「小田相川線」

● 沿革の概要

古来海府の一寒村として海岸低地に羊腸たる小徑の一線ありしのみにて相川への通路も峻坂四十二曲に妨げられて交通の不便甚だしかりしが大正五年郡道として開通されてより交通の利便頓に開け車馬の往來を見るに至れり。大正十五年県道に移管さる。大正十五年より三ヶ年天野弥藏氏経営に係る客馬車通行し尙小田後尾岡の郵便物送達に當れり。昭和四年より自動車通行す昭和九年鹿ノ浦墜道開通し今日の如き頻繁なる交通を見るに至れり。

● 延長

鹿ノ浦より外海府との界立鬘川に至る高千村地内の巨圍約一四・五料

● 幅員 二・八米

(B) 材道

村内各字部落内を縦横に通ぜらるもの

路線数 一千三百二十二線
合計延長 六百二十二米

(C) 橋梁 主なるもの左の如し

入川橋	長四十間 幅九尺	小野見川橋	長十六間 幅十二尺
石名川橋	長二十八間 幅九尺	石花川橋	長二十四間 幅九尺
以上の外長十間未満幅六尺以上の小橋 二十九			

(D) 横断線 「入川梅津線」

高千村入川より加茂村梅津に通せんとするものにて現に昭和八年全九年の経緯事業にて工費七千円を投じ高千小字校敷地南側を起矣として八百米完成しあり

(E) 山越道

○ 金北山越

南片辺より金北山を経て金沢村吉井村二宮村に通ずるもの金北山道約一萬
二千米

○入川越

入川鉦山軌道を経て青ネバ峠より梅津に通ずるもの頂上道約八千七百五十米

○石花越

石花より真利根を経梅津川の上流落合にて入川越に交流するもの頂上道約
七千六百米

○後尾越

後尾より真利根を経入川越に合するもの約六千八百米

○小野見越

小野見より加茂村白瀬に通ずるもの約六千三百米

○石名越

石名より加茂村馬首に通ずるもの約七千米

(F) 林道

○南^北道線

延長二千五百米〔昭和十一年末〕 幅員一米八十 工費二千五百円

○石名線

二千七百四十米〔全〕 幅員一米八十 工費四千五百円

以上二線は昭和八年乃至十年に於ける救農事業

(D) 海路

(A) 航路と船隻

高下港

○和船時代

往昔一漁船の止る港にすぎざりしが明治三十九年頃より加賀能登越中方面の
和船寄港し始めてより明治四十四年より大正十年頃迄江津松崎寺泊との間
に和船の往復繁く主として木材を運搬したり

○発動機船時代 相川航路

明治四十二年天野弥藏氏経営に係る発動機船は寺泊との間に木炭の輸送を開
始したり 是を渡に於ける発動機船の嚆矢にして新潟県下にては第一隻目な
りと 大正十一年客船高千丸相川との間に定期航路を開始せり当時往復共に
乗客平均二三十人を越えたりと 次で宝安丸 高昭丸等も客貨兼用として相
川通いを開始せるも昭和九年鹿ノ浦墜道の開通によりて陸路開けたれば海路
は漸次衰へ現在は高千丸のみ之を行ふも乗客は平均三四人なりと

○新潟航路

現在は宝安丸等丸佐丸高昭丸等本村人所有の発動機船其の他により新潟
航路盛に行はれ主として木炭の輸送をなす

(B) 築港

第一期着工昭和七年十一月十日竣工昭和八年十一月二十三日
 第二期着工昭和十年二月廿三日竣工昭和十一年三月五日
 以上工事により高千港の施設大いに備はれり

(A) 輜車

計	石名	小野見	北野流	高下	千本	八川	北立島	北河内	後尾	石花	北花江	南片辺	字別線	教自動車	自軌車	リヤカー	荷馬車	荷車
二五	三二	一九	二二	二二	二二	三六	二〇	三〇	二六	一三	一四	一一	一一	一	一	一	一	一
五	二	九	二	二	二	六	〇	〇	六	三	四	一	一	一	一	一	一	一
五	二	九	二	二	二	六	〇	〇	六	三	四	一	一	一	一	一	一	一
二	一	一	一	一	一	二	一	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六	二	二	二	二	二	三	三	六	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
七〇	一七	四	八	二	一	三	六	四	二	一	三	六	六	一	一	一	一	一

(8) 通信

(1) 高千郵便局

(A) 沿革の概要

◎ 局舎の位置

明治十年一月一日より全十四年十一月三十日迄在渡国雑太郡後尾村千三百三十九番地、一 明治十四年十二月一日全郡全材千三百三十八番地に移転

◎ 局の等級名称及監督局名

等級 三等 名称 後尾郵便局〔昭和八年四月一日高千郵便局と改称〕
 監督局名

新潟縣廳	明治十年一月一日より	全十六年六月三十日迄
新潟縣送出張局	十六年七月一日	十九年五月廿四日
新潟通信管理局	十九年五月廿五日	廿三年三月廿一日
東京通信管理局	廿三年四月一日	廿六年九月三十日
新潟郵便局	廿六年十月一日	四十二年三月廿一日
新潟通信管理局	四十二年四月一日	大正二年六月十二日
新潟郵便局	大正二年六月十三日	八年五月十三日
仙台通信局	八年五月十四日	昭和十一年十月十五日

東京地方逓信局 昭和十一年十月十六日より官制改正の結果終管
局長の官職氏名

任年月日官	職氏	名退職年月日
明治十年月日	四等郵便取扱役 渡辺利喜藏	明治十四年七月廿日
十四年十月一日	右水谷熊次郎	
十九年五月廿五日	三等郵便局長 全	明治廿五年十月廿日
昭和元年十月一日	水谷 征平	昭和八年十月廿八日
昭和八年十月廿八日	水谷 源平	

逓信区及集配度敷

郵便区
市内……後尾、北立島……集配二度地
第一区 千本、高下、北田野浦、小野見、石名〔北田野浦……集配二度地〕
市外 二区 入川、入川鉾山 〔入川……集配二度地〕
三区 石花、北片辺、南片辺 集配一度地
電信区
直配達区内 南片辺、北片辺、石花、後尾、北川内、北立島、入川、千本
区外 入川鉾山

電話区

普通加入区域 石花、後尾、北川内、北立島、入川
特別加入区域 南片辺、北片辺
呼出区域 南片辺、北片辺、石花、後尾、北川内、北立島、入川

郵便事務

明治十年 一月一日 郵便 明治四十三年十二月六日 電信
十八年 十月一日 貯金 大正五年 十月一日 保険
十九年 四月十五日 廃止 十五年 十月一日 年金
二十九年 五月一日 再開始 昭和四年 二月十日 電話〔通話〕
三十二年十一月一日 為替 八年 三月廿日 電話交換
三十二年十二月一日 小包

郵便事務取扱件数〔昭和十年度〕

普通郵便 引受六二八一 配達一四九三
書留郵便 一一一四 一九三一
小包郵便 一七八二 四三八〇
(C) 電話加入者数 一三
(D) 北田野浦郵便局

(A) 沿革

○大正六年八月十一日開局 三等局無集配
 ○初代局長 田辺孫太郎 大正六年八月十一日任官六級手当
 昭和十年四月十二日退職二級
 ○二代局長 田辺五作 昭和十年四月十二日任官五級手当
 ○取扱事務

大正 六年八月十一日 貯金為替係

七年九月廿六日 電信

昭和六年九月六日 通話事務

十五年十月一日 年金

十一年七月六日 電話交換

(B) 郵便事務取扱件数〔昭和十年度〕

普通郵便引受

無集配故不明

普通郵便引受五二五

小包郵便引受六五六

(C) 電話加入者数

九

(B) 歴史

(1) 名勝古蹟

◎ 石花城址

城址は大宇石花にある 部落の直ぐ後の田圃の中に一の丘状をなしてゐる 丘の周囲は水田に耕作されてゐるが昔の面影をよく偲ぶことが出来る 城址は守

護地頭時代の遺跡であつて其の昔相川から外海府の岩谷口に至る二十四ヶ村を領してゐた石花將監の居城である石花氏は雑太本間氏の庶族である天正年中越后上杉氏に亡ぼされたと伝へられてゐる

高殿の三つば四つばの跡訪へば

夢の二葉に雲雀鳴くなり

◎ 影の神

城址は山を貫き海に臨み登れば高十一帯を眺めることが出来眺望絶佳である 影の神は大宇後尾の海岸にある巨巖である岩質凝灰岩 部秀を由る約五十米の処にあつて巍然たる雄姿はよく北海の怒涛に抗し岩上ピヤクシンを以ておほはれてゐる 登れば海岸一帯の风光を眺める事が出来眺望絶佳である附近には小魚棲息し殊に秋になれば愛釣家が群をなして一日を行樂してゐる巖中に空洞があつて舟を入ることが出来る絃をたたくと岩壁に反響して鼓を叩く様である 洞の奥には不動明王を祭つてゐる祭日は六月十五日である洞穴の巖頭からいつも清水がおちて之に当ると無病息災よく長生することが出来ると伝へられてゐる 海府観光客は勿論過路客はわざ／＼舟をやつて洞穴に入るが婦人は崇りを受けると云はれ入ることを禁じられてゐる 朝陽の出る時は靈峰金北山の祠堂の形がよく此処に映るので影の神の名がある

夕汐のさす水に影の神代より
波の白ゆふかけぬ日ぞなき

エ屋賢經

懸影と神

石井四山

巨巖百尺頂頭平

脚下空洞海潮鳴

騷客未知此絶勝

影神併見石花城

檀持山

檀持山は佐渡ニ雲山の一であつて清水寺の奥の院に當つてゐる石名川の上流清水寺を流るること約五十町山中に堂宇があつて釋迦如來を奉尊としてゐる此の山は弘法大師の阿山せうものと云はれ山名は音釈尊因位吉行の靈地檀持山に擬せるもので三國(天皇、靈山、日本)ニ所の靈山と云はれてゐる佐渡名勝誌佐渡秘赤社境内案内記清水寺所藏古縁起書によると人皇第五十一代平城天皇の御宇大同二年(今ヨリ約千三百年前)高祖弘法大師當國に來り修行の淨地を此所に求め山に登るや重藤白雲の神人に導かれて遂に此処を聖地と認んだと云はれてゐる山体は紀州志野山に似て誠に森嚴幽邃である山中には四十八滝が懸り清流が滔々と流れてゐる山頂には祥雲が常に懸り其上靈禽佛法僧鳥の振鈴の如き音に聞くもの敬神の念を起さぬものはない以天吳國より此の靈峯に参詣する道人の数は少くなかつた 人皇第七五代崇徳天皇の大治年中(大師滅命二百年)

道人某經載を興して此の山中に來り草庵を結んで修行に余念がなかつたまほ山中に住し冬は里に住居したとして石名川一院を建てた是が檀持山別當今の清水寺の起りである此の年長承元年(今ヨリ約七百年前)である 御水尾天皇元和六年(今ヨリ約千三百年前)彈正上人は此相五元なりといふが來て真更川山居と兼住し堂宇を改築し其の奇蹟が多かつたと云へられてゐる 室曆九年扶桑行者瑞音と稱する者が來て洛陽佛工駒井柳賴が京都管願寺本尊を摸倣せる阿彌陀如來と奉安し又有縁の檀信者を勸化して堂宇の經營につとめたと云はれてゐる天明元年(今ヨリ約百五十年前)前水喰上人は九代村平澤木喰堂と夫に檀持山光明堂を再建し外に藥師如來地藏菩薩等の佛像を彫刻し又堂内合天井五十余枚の梵字光明真言書を残した爾來無石の道士の來るもの敬多し或は眞紫より來て石造の道標を立て或は陸奥松前寺より來て經を載むる者など其の敬が非常に多かつた今参詣曠路と由緒を記して見ると清水寺を發し寸町許りで駒止石に着く其処から更に四五町程行くと仁王石がある其の高さ三尋魚竜の滝が懸つてゐる更に行くと程なく柳の木に着く傘に似てゐるので傘蓋樹と云つてゐる樹下に二つの口の石がある直徑五尺大師が此処で遊心經を修せりと云へられてゐる更に行くこと四五町の所に櫻川がある登山者の懸衣して身心を清淨にする所で附近に青竜の滝がある青竜権現を祭つてゐるそれより二町許りで櫻の木がある毎月二十八日樹上に不

動尊が現はれるので之を阿志羅樹と云つたが怪しい哉今は此の木はなくなつて
る。之より開山沿へて経路を登つて貫字ヶ岡に着く此処に堂宇がある本尊
釈迦如来其他鎌倉佛の古像及び木喰佛等数体を祭つてゐる周囲に松林の鬱蒼と
して茂るあり森厳幽邃の地である此の山古来より靈驗奇蹟多く大旱には慈雨を
降らし悪疫を除き魔障退散等の伝説が多い

俗語 檀持山の嵐石名御祭鳥と吹さ下るす
備考

● 傳法僧鳥 古海ニ日ヲ 深山に棲山鳩に似て小さく頭薄黒く羽縁にて腹背
碧緑尾の端黒く嘴細く脚赤しと

● 木喰上人 木喰上人は近代に於ける代表的佛工で世界的藝術家と稱揚さう
れ八十四年の生活中二十餘年を日本全国に残したと云ふ上人は諸國を遊歴
して一所に留ること無かつたが彼が在渡に四ヶ年の間留つたと云ふこと
は奇蹟と云ふべきである

● 清水寺
大字石名にある檀持山と共に石で昔から海府宗教の中心である此の寺の宝物
として大師唐土より伝来せる銅鐸及び鎌倉佛彈管作鎌倉佛運慶作釈迦出山の像
などを藏してゐる。山内の巨石に天孫岩がある天婦銀杏と呼んでゐる樹容壯大

樹齡幾百年か測り知ることが出来ない山門には清水が滾々と湧出てるる夏日
天の日も陽光なほ此の樹間を漏るることがない銀杏樹下に憩ふ行客遠路の影は
いつも絶えることがない

(2) 伝説

伝説とはどんな性質のものであるかと云ふことは論ずる迄もない世の中が遠く
伝説は遠く 村の伝説は至つて少ない何処の田舎へ行つても狐狸に關するものが
最も多い村にも狐狸に關するやうなものや其他一部落に一つ宛はないでもないが
それは伝説の中へ入り難いし唯一つ高千村の持つ誇りで全国的に佐渡高千を
紹介してゐる伝説があるそれは先述鹿、浦に残つてゐる伝説であるしかし村人は
注意も忘れかちなのであるまいか却つて畑野の守壽姫が宣伝されてゐる位であ
る勿論史実については名所古蹟の処に詳記してあるが、母を尋ねて、守壽姫と
対志王丸、厨志王丸、守壽姫、弟の鬚のもとに小説に書き下されてゐる夫れ
は少しは区々の処もあるが佐渡鹿の浦の名はない事はない又これなくては語るこ
とが出来ない近頃は唯単に親子の悲劇としてのみでなくむしろ安壽の弟を思ふ情
の方面にアロットを込めてゐる赤い夕日の越后の海でお母さんとは生別れ波は
え行く人買ひ船の忘れられない權の音 伝説は伝説として子供を大人に浸らせた
いし又全国に高千村を宣揚するにこれに及ぶものはなからう

浦には四十ニ曲リといつて道がくねくねといくつにも曲らねばならない峻しい山三四もありました今しもこの四十ニ曲リの山路を一人の立派な侍が供をつれて上つたり下つたりしてゐます唐草に月の模様を浮出した水色の着物を着て佐渡の様な田舎では判應鬼ろこも出来ない立派な姿でしたところがその立派な侍が顔の色も蒼白に黙々として一口も話さないでせつせと歩いて行くのがなほ不思議でなりません月の夜のことです二人の歩く姿は木の間に見えつかくれつしてゐます丁度四十ニ曲りの坂下の小さい藁屋の家から世にも哀れな蚊の鳴くやうな声が波のあいだに面えて来ます今迄だまつて居た侍は急に立止つて耳に手をあてました

安寿恵しや ホーホラホイ

厨志王恵しや ホーホラホイ

鳥も生あるものなれば 追はずに飛てよ疾うく

消え入るやうな悲しい声でした 侍は思はずあ、母上の声だたしかにさうだあ、なんといふあさましい姿であらうと韋駄天の如くその坂をかけ下りました先の陸奥五十六郡の殿様岩城判官政民の奥方か人も住まない海府のはてのあはれな姿でした

(三)

さて丹後に賣られた安寿姫と厨志王丸は又悪党の山莊太夫に買ひとられました二人はその日から姉は海へ潮を汲んで塩を焼きに糸紡ぎに少しの暇も与へられませ

ん弟は弟で山へ薪をとりに追出して少しでも休まうものならば踏んだり蹴つたり牛馬よりもひどい使ひ方で指がち切れて母の名呼べば山莊太夫の目が光る唯さへつらいこの仕事むかしのお城の生活が思ひ出されてとても我慢が出来ませんけれども二人は佐渡へ流された母上のことを思ふといつも涙がとまりました二人が互に慰め合つて泣き明す藁屋の庵に青い月がさし込んで合はす両手に波が鳴つてゐます番人はいつも人の寐た後に二人が抱き合つて泣きながらいたはり合ふのを見つけて二人は別の小屋へ入れられました今度は姉と弟別れです親子四人が生別れです姉の安寿はこの苦しい枕檻からせめて弟だけでも逃がしてやり度いと神や佛に願かけて今かくと時の来るのを待つてゐましたするとこれも神様の御引合せか丁度青い月夜の浜辺に潮を汲みにやられました安寿はこの時とばかり静かに泊つてゐる舟に弟をたのんでこの鬼のやうな山莊太夫の所から逃してやりました逃れた津志王は天子様の御出になる京都へ行きましたが何処も行く処がないのでぞこらをぶらついてゐましたすると丁度そこへ梅津院と去ふ立派な御役人が奥方と一緒に自分等に子供を授けてほしいと清水寺へお詣りする丁度三七十一日の満願の朝出合ひました二人はこのきたない身なりこそしてゐるが何処か品のある厨志王を神様のおさづけとよろこび勇んで連れて歸りましたさて京都で出世した弟に引きかへて丹後に残された姉の安寿はそれ／＼とてもつらい思をせねばなりませんでした仕事は二人分も二人分もの外に弟を逃したと去ふ事が山莊太

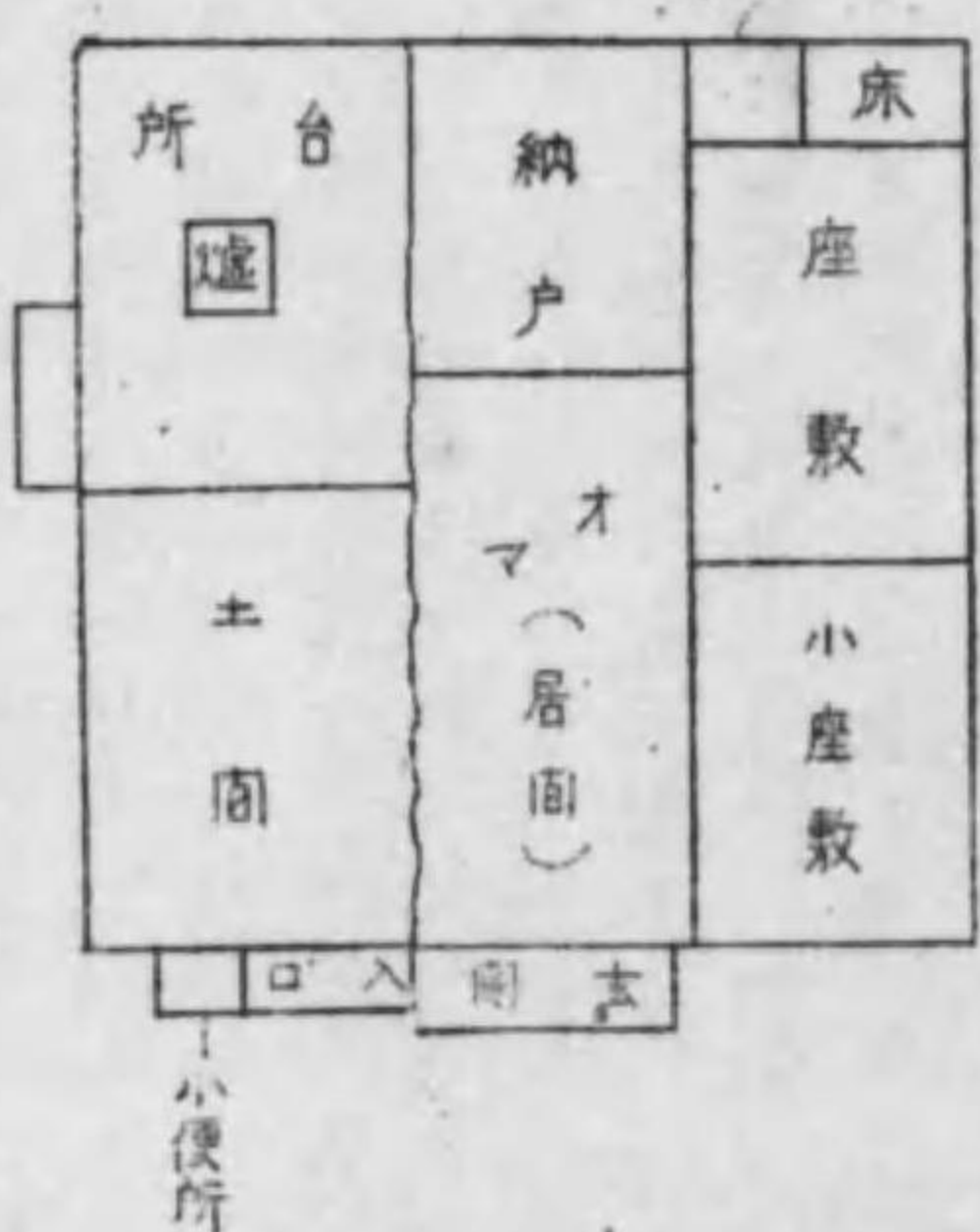
主として海荒いこの浜でわづかの漁撈に生活して行くに事足りる茅屋の粗朴なものであつたらう現在に於ても北方西比利亜の所謂「サイベリヤンムンストーン」の猛烈な風襲をうけてゐるのを常に考へ入れてか他地方と建築に於て異りその上十一月の声を聞けば全村を奪つてこの防風工作に幾日かを費さねばならぬ

〔位置〕北面した七八十米の段丘が海岸に迫り其の脚と海岸との僅かな平地に部落を南北に貫通する県道の沿線だけが道に面し其他は全部東西南北各方向に向つて僻然とした集村落である海浜は大時化の時常に海と化し波の洗ふところとなる結局人家に怒濤が嘔みつくといふところである

〔外観〕全村殆んど平家建て二階建は極く最近新築されたもので数へる程しかないこれは風の影響に依つて低くするものである居根は従つて低い棟から緩かな勾配になつて長くのびてゐる開口は奥行より広く葺く物は瓦又は木羽葺「松皮葺」の如くにしてその上に径五六才の石をのせて飛散を防ぐ「何処でも母屋よりも土蔵に多く瓦を葺いてゐる材の北半には木葺の所も相当多い又の爲に可成的に軒を低くする関係もあるであらうが窓が少くあつても小さく又周囲に混合つて建つてゐるから内外観共に陰鬱である

〔構造〕母屋納屋土蔵牛小屋便所は別棟が普通間取りは全村殆んど大同小異と云ふよりもむしろ同一に近い

種佛



各部屋の境は壁でなく木の戸或は障子襖である
押入のないものが多い

座敷 通常床ある場合に用ひ一側に仏壇と床とを並べて設ける

小座敷 次の間ともいひ若者の部屋に充てる

納戸 寢室

オマ 居間、に炉のあるところもある
台所 炉を設け一隅に竈を設けてある家族は四季を通じてこゝが団聚の場所であり
土間 土間と云つても外からの土足は許されず履物は小便所のある入口の所に脱ぐ

土間 土間と云つても外からの土足は許されず履物は小便所のある入口の所に脱ぐ

こゝは裸足で歩く

納屋 納屋の一部を割いて牛を飼ふ様にしてある

便所 必ず別棟で母屋と少しはなれてゐる

土蔵 戸は朝音開きといつて扉が両方から開く味噌蔵は引戸が普通

井戸 殆んど各家にある過半は屋外に在り内部は木框及セメント框等を用ふること

なく多くは自然石をもつて疊み上げてあるが近年に至り打抜井戸の數も著しく増加した

炉竈 日常多くは炉を使用し竈を使用するところ少し近頃改良竈めか竈も使用さ

風呂 殆んど各戸にあり多くは長州風呂であるが中には桶風呂も少々ある

燈火 昭和七年八月一日信用組合によつて良燈せりれ全村之を利用してゐるが赤だ

ランプの所もなきにあらざり夜の外出には赤だ定紋ある提灯重きをなしてゐるが漸次自転車用電灯之に代りんとしてゐる

神棚 オマの鴨居の上に設けるか又は座敷の床に設けるが祭壇に至つては他の町村

に比して一般に粗末である

膳棚 重要なる家具としてお膳及食器類を入れる

〔服装〕

昔は自家で織つて着用した今も蚊帳炬燵掛をはじめ山へ着る裂織を織るものが多い

しかし今は次才に贅沢になつて虚栄心強く着物多さを誇らし着物を買はんが爲に働くといふ現状なので婦人会等率先して生活改革に努力しつゝあるは誠に喜ぶべきことである而して本村特有の服装は裂織のズンザを着用した山行きの姿である

裂織は文字通り木綿を裂いて織つた着物である其が珍らしい理由は袖の丈が一尺七八寸の半幅の平袖であるから腕の中程しかかない手をあげれば脇は勿論横胸迄も手には黒か又は紺の甲手を腕の奥までしかせてゐる裾は膝より短く其の下はこれ又黒又は紺の股引を穿く男は頭に横鉢巻をしツツレ織と云ふこれ又裂織の角帯をし母にドウラン足に藁のぬいご製のハバキをつけ卓鞋を穿き背にはテゴと称して細き縄をもつて編んだポストン靴の如きものにワツパと云つて木で作つた円形又は楕円形の弁当を入れて喰しき山道に登る姿である女は鉢巻の代りに手拭を使用した頬振りハバキなしで如何にも身がしまり体が軽快に見える若い娘などは普通の着物の短いのを着長い靴下に地下足袋をはき甲手をつけ附帯を露出することがないモンペも次才に普及し洋服にゲートルといふ姿も多くなつた

平常服は平常着てゐる着物を長着物といふて普通の木綿服である裂織でも長着物を作るこの際は袖丈を二尺とし山着は半幅袖であるがこれは一幅袖とする浴衣はあまり着ない子供は綿の入つた袖無羽織を着るこれをトンチンと云ふ小学生は夏は羽織とも殆んど洋服冬期は赤だ普及しない

式服 紋付羽織は着用するが袴を穿かないものが多い。女子は冬期各部落毎に師を招き公会堂等に練習^{練習}或は私塾に通ふ者もある。

一飲 食一

飲食物は一般に酒を除いては粗食である。近年農業も躍進的發展をしてゐるが未だく他の先進町村には及ばぬし且又交通不便等の關係にもよつて食料品の種類が少く又農産加工の智識に乏しいのにも原因するのでありう事ある時の料理人は全部男である。食事はまだ一般にお膳を用ひせは足高きものにして飯台の所は極く僅かである。常食 麦飯を常食とする米の飯は白飯と称し芋ある時に炊ぐ。

味噌 自家醸造で概ね三年味噌を嗜つて用ひ

醤油 従来は醸入せしも次第に自家醸造の機運に向はんとしつゝある。

酒 村内に醸造元一軒もなし然れども消費量多く事々に飲酒し杯は俗に白鳥と稱する大杯を用ひ

奥肉 海洋ではあるが漁業が振はないのはハニ九戸の中漁船が三六〇位あるので

知れる又漁を専業とするものもないし又魚肉として最も多く食膳に上るものは鰯鳥賊これについて秋刀魚にして之等は冬期産魚として置くが其他の奥

は極く少量しか獲獲されぬ

鳥獸肉 一般に食されること少く鳥とは鶏であるが未だ飼養数も少く又自家に飼つた

ものは殺すに忍びず又牛の飼育は盛であるが村内に屠殺場なき爲に相川よりの行商を待つ現狀である近頃は山林を荒す野兎の捕獲を奨励するため次第に盛ならんとしてゐる

その他 村に搾乳場一ヶ所あつて需要に應ずる

一年中行事一

年中行事は風俗の中では最も重要なもので而も日常生活を織込んだところに其土地の生活がしのばれる様で揚げられたものは大体に於て最もよく現行はれてゐるもののみとしたが中にはもう廃れてなくなつた部落もあるが止むを得ない又村民は殆んど全部が農業なので未だ太陽暦を使用し官公署以外には太陽暦を用ひないので自然新旧混合したがこれ亦仕方がない「〇は新暦」

〔正月〕

- 一日 神詣 年始固札
 - 二日 吉初め
 - 三日 坊さん殺し僧侶が檀家へ年始に廻る
 - 七日 七種粥 七種噺す歌、唐土の鳥
- 十四日 若餅を搗く、とうろうをはやす松飾を海岸に持出で、燃すこの火に暖をとれば邪気を払ひ齡を延すとて餅錫等を焼き又子供は吉初を棒

十五日 涅槃會、釈迦のともすとして瘦馬園、
 子を仏に供す
 〔三 月〕
 二日 宵節句として雛を飾る
 雛祭り、新粉餅を製し去年の今日
 以後生れし女兒の家は母の実家よ
 り雛を贈らぬ祝す
 真言宗は生誕日として一日念仏す
 〔四 月〕
 八日 釈加降誕會
 入川七三戸火災記念日
 〔五 月〕
 五日 節句、茅絛を製し其湯を家の周囲
 にかけて邪気を払ふ前日より菖蒲
 湯を沸して浴し屋根に蓬と菖蒲と
 十五日 小正月
 十六日 小正月、子供御覽より鳥追をす
 二十日 正月納め
 廿八日 正月納め
 〔二 月〕
 初 午 玉の餅をいつて神に供ふ
 相川へ神社参りに出る
 節分、窓の下に小さき木札に
 十二月と書き立てる
 九日 山忌、此日は神軍行はるとして
 一日山野に出でざりしが今は早
 朝午前となりそれも定かならず

〔六 月〕
 一日 齒堅め正月の堅物を焼きて食す
 去来五日 海に入り薬草を採取す
 〔七 月〕
 一日 新仏ある家は今日より月末迄屋
 外に七八米の柱を立て之に燈籠
 を〔三 年 間 迄 一 年 限〕吊す
 〔短 眞 言 宗 だけ 内 後 宗 は 立 て ぬ〕
 功徳日 全村巡礼をなす
 十三日 鉦山祭
 十六日 草角カ盆踊りオケサ節で昔のノ
 ヤ節なし
 二十日 旧田野津祭
 廿六日 旧高下祭
 〔八 月〕
 一日 八朔

六日 旧小野見祭
 十日 旧入川石名祭
 十五日 名月、旧十本祭
 〔九 月〕
 九日 節句
 十二日 旧後尾祭
 十五日 旧北片辺祭
 十六日 旧立島祭
 十八日 旧石花祭
 廿五日 天神送り
 廿九日 彼岸中日
 神送り〔神無月のはじまり〕
 〔十 月〕
 十日 大根年取大根を取らず食せず
 亥の子 二回の時は初三回の時は中、炬燵
 と開く
 十五日 虫供養

二十日 夷講 二段大根を供ふ
 廿五日 天神迎へ
 廿九日 神迎へ一才の男女鬼は忌にあたる
 餅をつく
 この月稲の刈取を終れば山に放牧した牛を里に追出す
 「十一月」
 〇日 牛セリ市
 八日 ファイゴ祭「鍛冶屋だけ」

十五日 紐解き 三つだけ五つ七つは祝せず
 廿三日 大師講 大師／＼七大師俺も漆へ
 八大師団子八つ作る
 「十二月」
 朔日 乙子の朔日
 下旬 煤掃い
 廿二日 冬至 必ず南爪を煮て食す中風にならぬとの伝説による
 廿八日 松飾

「子供の遊び」

子供の遊も古はぬにきたる夏衣かなで誰がするともなく其の時／＼にはじまつて終つて行く

「二月」

正月はイロハがるた双六の類は稍行はれるが百人一首に至つては未だ盛んには行はれない雪に鎖されるので室内に遊ぶ 雪すべり 雪達磨 糺「スキーをする様な雪は積らぬ」女 凧船 碁石遊び 羽根 雛様遊び 男 凧上げ

燈籠合戦「入川より南」

正月高き柱を立て、これに竹を裂きたるものを丁度傘の骨の如く垂下させ赤黄白緑等五色の半紙大の紙片を無数に下げ其の頂に木製で金箔を張り鍍金打った兜をつけてあるこれを雪彈又は石彈によつて打落す戦酣となれば之に攀が登つて奔はんとしてそこに大混戦を展開する晝間喊声をあげて攻めかゝり又は夜陰に糸じて番人の非常召集を行ふ隙に奪ひ取る敵軍の將は翌日威儀を正して敵方へ取られた兜を乞ひ請けに行くこれは各部落討抗又は全一部落にても南北二組に分れて少年の志気を鼓舞して居る

「三、四月」

天気も次第に晴天が続くので外でようこぶ 男雀取り 独樂 パチンコ
 女籠とび まゝごと 地面取り

「五、六月」

蕨とり ひる取り 臭釣り

「七、八月」

海水浴 蟬とり 角力 鮎とり

「九、十月」

栗あけび取 お手玉

素仕等 依繪み 繩なむ 穂草取り 根ッ木 野球 まりつき 綿物
村内には劇場がないので活動芝居等娯楽慰安の機会が割合に少い農閑期に各部落共
外海府村園天柄から人散を招いて公会堂に催すか又は巡業浪花節及部落青年團の演
藝会券が唯一つのたのしみでラゲオの数も至つて少い

一言 語

高千の言葉については近頃研究といふことがやましくなりいろ／＼系統づけやう
とする輩が出てゐる 佐渡一田に關西系と言葉が冬いとしても地理的に考へて地勢交
通上からいへばどうしても外市との交渉があらざることは考へられぬ故に果して高千へ入
る力があつたか否や然らば關東か各日本の言葉を關東と關西に分けるといふ事は不
合理であるが故に又しくこゝに當つて正確に之を聞いてゐると結局は海府は海府地
自の存在ではなからうかといふところは落着する

- (一) 否定に關するもの
 - 東 行かない 行かなかつた
 - 西 行かん 行かなんだ
- (二) 命令に關するもの
 - 東 受ける 勉強しろ
 - 西 受けい 勉強せい

(三) 波行動詞

- 東 言つて 言つた
- 拾つて 拾つた
- 西 言うて 言うた
- 拾うて 拾うた

(四) 副詞に關するもの

- 東 よく見える ようしくいふ
- 西 よう見える ようしういふ

東は關東であり西は關西佐渡は全部である 券を拾つて見てもはじまらないと思ふ
東に研究の余地は充分にあらう
佐渡に於て海府の言葉といふこと (一) 語感が荒い (二) 調子が早い (三) 敬語が少い
他は本へばダラレドド位のものであらう 之は北風強き怒濤の園に用を弁する
為自然この如くなりんとさもありん 然し乍ら嫉しなつかし話をしてゐるのでも恰
も喧嘩をしてゐるか如く聞えるのは快よきか 又荒いとは去ふものの物を無心し依
頼する時は別人の如く鄭重であるのも珍奇な事である 相川のチヤは飲まれん茶
沢根のテイは食はれん鯛 越后のガンも食はれん雁 と、にはこんなものはないが
ホツカイロウレコロモドクニンランラ……北海道で子供六人生んだ があるし又次
のやうな事も去つてゐる
とてして貴方はそんな事を去ふけれどもあの女の子は悪い子でこんな事いふて居る
向に擲つたり追つかげたりしてさつさと逃げてしまつた

○へてんなどんこと去ふけれあんおしやうの子はよげの子れこげん去ふとるこ
 まにしやいだりおげたりしてとつそくにげもつた
 のいつもこんなことをする………のじやうしきこげんことしる
 方言と去つても正しき古語あり普通語の僅かの訛でありながら全く別語の如く感ず
 るものもあるが現代の言葉に耳なれぬ言葉を一ニ拾つて左に載せる

人倫身体疾病等に関するもの

- | | |
|--------|---------|
| ラン「ダン」 | 父 |
| シネ | 母 |
| アンカン | 兄 |
| アンニヤン | 姉 |
| ニヨンサン | 僧侶 |
| ケツベ | 尻 |
| ガンチ | 片目 |
| ホーダ | 頬も髻 |
| ダナサン | 旦那さん、巡査 |
| ニンゴカク | 恥をかく |
| | 唾 |

- | | |
|--------|---------------------------------------|
| タビトサン | 旅人さん、商人のこと |
| ンナチ | お前だち |
| オツチヤ | 俺だち |
| ネシヨウ | 女性、女 |
| ランナ | 下女 |
| ゴケリ | 後家入り、後妻 |
| キンカ | 禿頭 |
| コウベ | 頭 |
| メトンボ | 鈍眼 <small>（トンボは目ばかり大きくて役に立たぬ）</small> |
| ロシ「ドシ」 | 同志、友達 |
| アネ | 嫁した女 |

ハンジヤレ
 オコツキ
 軽忽者

衣服服装に関するもの

- | | |
|------|--------|
| ゾンザ | 山着 |
| シテモン | 單衣 |
| ハダコ | 肌子 |
| ハンチヤ | 羽織 |
| ナマツポ | 帽子、南蠻詰 |
| トシナン | 袖無羽織 |
| テノギ | 手拭 |
| ユウテ | 湯手拭 |
| ザヨーリ | 草履 |
| ケチ | 幽霊 |

食物日用品等に関するもの

- | | |
|--------|-------|
| マモナ | 真餅、白餅 |
| コモナ | 草餅 |
| ドングリマキ | 柏餅 |

氣象、天文、土地

- | | |
|-------|--------|
| ツボ | 餌料 |
| イヲ | 魚の古語 |
| カエ | あわび |
| サゼ | さざえ |
| バンジョー | 秋刀魚 |
| イダフキ | 雑巾、板拭き |
| シバ | 新 |
| オモツ | お手玉 |
| クダリ | 南風 |
| ニシ | 西風 |
| アイ | 北風 |
| ヤマセ | 東風 |
| オトツイ | 一昨日 |
| キンニヨ | 昨日 |
| ヨンベ | 昨夜 |
| コマ | 駒、隙 |

ツムジ
ベト
ガンゴ
アサギリ
ヒルカラ
ヒナカラ
コンジナ
トツソク
トネ
ツンコ
グリラ
パンゲ
ツモゴリ
ノタ
セキ

山頂
泥
中空洞穴
午前
午後
半日
この向
早くから
遠根 奥山
山頂
周囲 附近
晩
船月陰がぼけて
モコ倒置
波（ノタノトチリ形）
堰（小川のこと）

〔五〕建築家具

イゲエ
マヤ
オマ
ニワ
カコ
オーマヤ
コマヤ
ハシリ
ハネザア
チヤン
トコ
カンコ
ヘンチヤ
カンジヤ
トオケ
ズボ

家
納屋
居間
土間
門 外のこと
納屋の一部の居る処
上部部分で人の仕事する処
流し場
魚釣等
茶碗
壺
漁船の大なるもの
厠
手桶
釜

内名詞

ハンジョー
ミザ
カンゴリ
ユルリ
トウビ
ナンブ
ミヤウゲ
トンチボ
アリンゲヨ
イン
ジウサンクリ
ウガ
キンギラ
ダンブリ
ガンロン
ムクロ

半疊入の莫産
床又は土間
垂水
るろり
犢
牝牛
牝牛
絡
躰
犬
鞆
鴉
きりぎりす
蜻蛉
蟹
もぐら

〔六〕動詞形容詞副詞助詞等

カゴメ
ドクマクリ
ミミツンボ
トガ
トンギ
ピンカカ
ビシヤル
ケエル
フンバル
オンゲエ
アマル
イケエ
シヤダ
テヨウ
ツヅクル
エ

鳴
どくだみ草
萱萩
黄楊
荊
犬糞揚
捨てる
転倒する
働く
恐ろしい
度々数多い
余計 たくさん
擲る
手寄る 手伝ふ
修繕する
よい

バケル
ホタク
ヅマウシキ
コゲ
ヘテヘエカラ
ザンズスル
マメ

戯れる
常に
こんな
さうして
悪口をぬふ
豆かり壯健なこと

ソゲ
ケレ
イキシナ
カヘリシナ
ドンケ

そんな
けれども
行くついで
飯をついで
どの位

其の屋号の呼び方
ハンニヨメエ 半右衛門
マンゲヨメエ 弥次右衛門
他に名前にエエをつけてよぶところもある
其外子供を呼ぶ時に屋号と名前の各頭音一字宛とつてよぶ
五平の長太郎 ゴンナヨウ
七藏の久太郎 シチキエウ

ヨヨメエ 與右エ門
モンザアレエ 門三郎
源吉エエ 平吉エエ
大助の武雄 ロクタク
門三郎の正 モンター

敬神崇祖の風は我国の傳統的精神で如何なる海外の移民先でも三人行けば必ず産土神を祭る祠を建て、るる 本村でも十二の部落各々が立派な社殿を建て、日夜敬神

「宗 教」

の念怠ることなきは衰りないがしかし一夜内に於ける神棚の設け方に至つては国仲のそれと比して著しく粗末であるこれは久しい慣習によるのであらうがかつては一時寺と風魔した唯物論の輩かなりし頃本村の爲政者にも之を改竄するものが多く爲に豊穡を神に祈願し感謝し且つは又日常生活による久瀕をよるこび文藝に勤む祖考幾十代或百年の美風は唯物質を目的とせる合併祭によつて一掃されてしまつた果せる哉思想的に動搖する者ありかつては郡内優良村を誇つた高十村も今や徑済更生村として日夜其島に喘いでゐる 今や郷土を再認識すべき此の秋風俗としての宗教も亦重大なものであらう 宗教は全村の九分九厘道真宗教にして寺院の五六も全宗たり 併し残りの一厘は門徒宗又は日蓮宗にして相川に菩提寺を算す 一般に佛を崇敬する念篤く仏を対象とする村の行事は一年を通じてオーであらう 天理教の教会ニありて村民の大部分之を信仰し「仏教役も」信者も亦熱烈なる信仰心をもつし加治祈禱等をはじめ村民の日常生活に活動的であるのは郡内に於ても珍らしからん 金光教小宣教所一ヶ所而して信者も前者に比すべくもありず キリスト教の信者ニミに過ぎない

儀 式

出生 子供は母の実家へ行つて産まれ七夜を祝す 概ね三十日を見当に婚家へ送り下月廿九日は「忌がかゝる」と稱して餅を搗きて近所親類へ配り庄屋(財産家)

の外は誕生を祝せず 紐解きの三つは他所のセユ三と異り男女共六一固なり
結婚 一般に早婚 式場には嫁ばかり坐つて婿は姿を見せず他家へ行つて居るこ
とさへある

◎葬式 人死ぬ時は入口に妻を解きたる扇及故人の着用した着物を吊し通行人に男
女年齢を知らせ且つ戒名を言いた位牌と木髷の熾燭を立て子供の時は之に椿の
葉を添へて立て通行人は此の葉をとりて傍の籠に入れる 死者八十才以上の老
齢を以つてする場合は棺の四隅に鶏を吊す此は古稀を遙に越えて日出度き意
なりといふ 又葬は海岸に石を築きて露天の窟を造り「八川立島田浦石名除ク」
親類縁者によつて行はれ其時の新は棺の通る道の家々が各々「二本宛道に出し
置き之を親類の人が集めて火葬場に至る つまり死後も人の舌話になり又生存
者は相互扶助の心からであらう美はしきことなり

◎年の祝 三つ男女共紐解き セツユツは祝せず 二十五「男」 三十三「女」
四十二「男」 六十一「男」 八十八「男」は忌禁をはりて盛大に
行ひ借金しても苦しからぬと、

「人情其他」

古来は荒く風旅は粗末で一見恐しい様であるが人情至つて篤く相互に助け合ふの精
神弘くことに吉凶の場合には親類をオヤコと云つてかなりの遠縁でも私事を捨て、

んど一家が手伝に乘る しかし地勢が然らしむる為は古代ギリシヤの如く部落感情
が強く村の発展に拳村一致の精神が乏しいと云はれてゐたが近頃は此の現象も次第
にうすりいで来た 仕事は標準時報がないので時間觀念に乏しいが早寝早起で勤
で殊に二回三回と云ふ長い材木を使か薪中に挿んだニドゥと云ふ径六七寸のワラ束
の作用によつて縦又は横に貫つて曲折した峻嶮な山道を下る様は手に汗を握らせる
見物である 近頃観光客が「島の女は働く」と云ふ題下にカメラにおさめる相川のも
のとはその規模に於て動作の微妙さに於て到底問題にならない

「俚 話」

- 片辺麻の浦中の水のむな 毒が流れる日に三度
- 女性の行かぬところは種特山とお山(金北山)それに続いて影の神
- 後尾と川内は川がなけりや一村だ
- 立島大瀬が思える見たい入川の岩のかげ
- 会ひたかごれ樋口小沢の中に居る
- 粉するさへこげだ 殿のナア夏山どげだやれエー
- 入川山の樋口小沢の下り藤
- 佐渡の海府は夏よいところ 四疊五疊の波がたつ

高千持質のものではないが所謂俚諺として日常使ふもの

○曆に關するもの

八尋八日 酉日 四日

天一天上雨降りす十方暮風吹かず

申酉荒れぬ戌亥子丑の横たへ止

北風と雇人は日一ばい

余寒の壁透し雲

東風商人は内へ入れるな

四月の中の十日に心ない者に使はれるな 十月の中の十日に心ない者を使ふな

○神仏に關するもの

せつない時の神頼み

習はぬ経はよめぬ

牛にひかれて善も寺詣

つれがよければ善も寺まいり

仏法も腹念佛

卯辰の朝は巳にかかろ

辰に立つて巳に着く

師走の八日吹雪

大師誰の跡かくし雲

彼岸すんだ麦ハ肥

遠づく神にばちあたる

仏に近づて眼入れぬ

やま燦ない時の夕方の木

こぼらぬ神に煮りなし

○人固に關するもの

馬鹿な子程可愛い

從兄弟と犬の糞は何処にもある

馬鹿と鉄は使ひやうで切れる

泣く子も鎧のたぬて泣け

目細はあつても口細はない

腹の皮がつつ張れば目の皮がたるむ

死ぬもの目から

○性行に關するもの

気は心

下司のなり上りは人をそりす

持ちつ持たれつ

仁見て法説け

猫の面倒見得ぬ者は人の面倒見得ぬ

○勤物に關するもの

人が頼めば犬さへ糞食はん

秋茄子嫁に食はせるな

伯母見りや荷が重い

根性よしは父なし孕む

憎まれ子賢堅い

色の白いは七粒かくす

小豆の火は馬鹿にたかせい

疾上手の死下手

志は松の葉に包め

遠くの親類より近くの他人

言葉に物はいうぬ

すく無し者の節働き

せ、なきほじると並附が出る

あたらぬ蜂はさ、ぬ

鳥は黒いに急まれず口に急まれる
 兎のもでついたほど

甜の水のむやう
 夏の牡丹餅大も食はん

四) 産 業

(1) 農 業

(1) 農業に關する組合

(2) 畜産組合 養蚕組合 養兔組合
 (3) 戸数「字別」 農家戸数 七二五戸

部落農区

大字	米作ヲ主トスルモノ		米作ヲ從トスルモノ		計
	自作	小作	自作	小作	
南片辺	三	四	五	三	九
北片辺	四	四	一	〇	五
石花	二	八	一	五	一六
後尾	三	二	二	四	一五
北川内	二	六	四	一	一三
北立島	五	六	一	六	一七
入川	三	七	一	八	一五
計	三〇	一〇	二五	一八	五三

町	所有者	耕作者
南片辺	五反未満	四〇九戸
北片辺	五反以上	一六一戸
石花	一町歩	一〇〇戸
後尾	二町歩	一九九戸
北川内	三町歩	一三九戸
北立島	四町歩	一三九戸
入川	五町歩	一三九戸
計	十町歩以上	一

(2) 主要農産物年産額

品名	十町歩以上
大豆	五二五反
小麦	五二五反
粟	五二五反
黍	五二五反
稷	五二五反
高粱	五二五反
甘藷	五二五反
大根	五二五反
レンゲ	五二五反
計	五二五反

(3) 耕地面積及一戸当反別

品名	反	金高
大豆	四〇〇	一六五〇〇円
小麦	八〇	一九二〇
粟	一五〇	六〇〇〇
黍	一五〇	六〇〇〇
稷	一五〇	六〇〇〇
高粱	一五〇	六〇〇〇
甘藷	一五〇	六〇〇〇
大根	一五〇	六〇〇〇
レンゲ	一五〇	六〇〇〇
計	一五〇	六〇〇〇

作付反別合計

三九五町 二〇歩

大字	種別		作付反別	收穫高(玄米)
	作付反別	收穫高(玄米)		
南片辺	一七九・一	一畝	三	四・五
北片辺	三三五・九	五	八	五〇・三
石花	二八八・六	二	五	五〇・三
後尾	二六二・四	〇	五	三三・一
北川内	二七〇・二	九	六	五三・三
北立島	二四七・〇	二	五	二二・三
入川	三九九・九	八	九	三三・四
千本	二九六・〇	五	五	四四・六
高下	二四九・六	四	七	二八・七
田野浦	三八一・一	八	八	四〇・九
小野見	二三七・四	九	五	七六・四
石名	三〇六・九	七	六	三三・六
合計	三四五四・六	一七	五	二二・四

他家畜家禽数

字別	牛戸数	馬戸数	鶏戸数	先戸数	家鴨戸数	山羊戸数	狸戸数
南片辺	八八三・八	二	二	一	一	一	一
北片辺	一〇〇五・九	三	二	一	一	一	一
石花	七八三・六	五	三	一	一	一	一
後尾	四一三・四	四	三	一	一	一	一
北川内	五七二・八	四	三	一	一	一	一
北立島	二六一・七	一	一	一	一	一	一
入川	四七二・九	一	一	一	一	一	一
千本	五〇二・八	一	一	一	一	一	一
高下	三三二・九	一	一	一	一	一	一
田野浦	一〇四・三	一	一	一	一	一	一
小野見	六六三・二	一	一	一	一	一	一
石名	一三五・五	一	一	一	一	一	一
合計	八三四四・九	一八	一〇	一	一	一	一

内林業

スギ 七五〇〇石
マツ 一八〇〇石
一六一〇〇石
八〇三七

ヒバ	五〇〇石	一七五〇石
ナラ	六〇〇石	一〇〇〇石
竹	二〇〇石	二七〇石
木炭	五万俵	

各登	棒立	七五〇石	次高	五一四石	全額	二七四〇石
合計		一、二五七		七三一		三、四八二

(内) 工業に関する組合

(内) 概説 本材の製炭者は全部佐渡木炭同業組合に加入し各々の製炭者は又各字単位に木炭副業組合を組織して製炭に従事してゐる

(内) 組合 佐渡木炭同業組合「高千村関係」 評議員一名 代議員一名
 木炭副業組合 役員：一年毎に交代 組合長一名 副組合長一名
 評議員五名 会議期日：二月中旬(日) 会議事項
 木炭一手販賣 炭材の購入 木炭品質の改良

(B) 木挽組合

(内) 概説 本挽組合の範囲は外海府(小田、大倉、矢柄、関) 高千金泉の三村より組織されてゐる

(内) 組合 役員：三年毎に交代 組合長一名 副組合長一名 評議員各字一名
 会議 期日：七月十五日(日) 事項 労働賃金の制定 景気変動の為に臨時總會により賃金の再制定をする場合あり

(C) 大工組合

(内) 概説 本材の大工組合は是を広範囲の大工組合と各部落単位よりなる小範囲の大工組合とに区分することが出来る 広範囲の大工組合とは外海府村(小田、大倉、矢柄、関、五十浦、岩谷口)と高千村の一部(石名、小野、鬼北、田野、浦高下、十本)とからなり小範囲の大工組合とは高千村の残余の部落が各部落毎に組織してゐるのである 内容は於ては大差ない

(内) 組合

○ 広範囲の大工組合
 役員：一年交代 組合長一名 副組合長一名 評議員各字一名 庶務會計二名
 会議 一月十一日(日) 一月十二日(各字毎) 事項 役員選挙賃金制定
 弟子入金の協定会計報告

○小範囲の大工組合〔入川他は略〕

役員 一年交代 組合長一名

会議 一月廿一日 五月五日 九月九日……全部旧

事項 賃金制定 臨時總會―材の仕事に請負する時等

(D) 鍛冶屋組合

(a) 概説

鍛冶屋は少数である為外海府高千金泉三材合同して組織してある高千村では石名高下立島川内後尾北片辺の部落にある延長三里に及ぶ材ではあるが鍛冶屋は一隅に偏せず概して適當の位置にある

(b) 組合

役員―一年交代 組合長一名 副組合長一名

會議 一月十五日(旧) 事項 賃金の協定 臨時總會―賃金の協定を破る者が出た場合之の整理の爲に用くものである

(E) 戸数

(4) 純工戸数

(5) 兼工戸数

水	大	鍛	製	計
焼	工	冶	炭	
一	二	一	二九	
三	一	一	九一	
五	五		〇四	
三	二		〇五	
〇	〇		一四	
八	一		一三	
一	一		一四	
二	一		一四	
一	一		一四	
九	六		一四	
八	一		一四	
一	〇		七	
〇	二		一〇	
二	二		二五	
二	三		二九	
一	四		一四	
二	二		一八	
一	一		二六	
四	二		二二	
四	三		三三	
〇	八		八四	

鍛冶 河内一 北片辺二 計三

(C) 工業従業者数

水	大	鍛	製	計
焼	工	冶	炭	
一	二	一	二九	
三	一	一	九一	
五	五		〇四	
三	二		〇五	
〇	〇		一四	
八	一		一三	
一	一		一四	
二	一		一四	
一	一		一四	
九	六		一四	
八	一		一四	
一	〇		七	
〇	二		一〇	
二	二		二五	
一	三		二九	
一	四		一四	
二	二		一八	
一	一		二六	
四	二		二二	
四	三		三三	
〇	八		八四	

(B) 小範囲の大工組合

前表により小範囲の大工組合の概況を知ることが出来るが即ち本材の工業は大工水挽製炭の二つが主であるが但し是等は純業なるものは無く殆ど農業を主とした副業的生産である今統計表を用ひて大工水挽製炭の現況を管見しやう

(A) 大工 高千村に於て大工を以てする家の数は一七四軒従業者は二二三人で

商業

商業に関する組合

(内) 理髮組合 同業者四 名称 相川警察署管内理髮同業会第二支部

(外) 旅館料理屋持客組合 旅館六 料理屋四を以て組織する組合にして組合長一副

組合長一 総会年二回 本材宿泊旅客数一ヶ年約六千人

ある字別に見ると家の数は石花の二七軒が最も多く従業者は石花の二九人が最も多い家の数の最少なのは小野見の五軒従業者の最少なのは小野見の八人である而して昭和十一年十二月現在の調査によると二二従業者中居村者は一一人出稼者は一一人八人で初半数は出稼である
 同業 従業者一八三軒一九〇人で最も多字別に見ると石花の二三軒二九人が最も多小野見の五軒六人が最も少い前全様調査によると居村者九三人出稼者五七人初半数は出稼者である
 以上要するに本材の工業は副業的生産業なる点に於て大なる進展を遂げ得ずして今日に及んでゐる而して是が副業たる以上将示の発展は至極の問題である

(四) 商業組合 商店を以て組織せる組合は昭和九年迄存続せるも解散して無し

合	石	小野見	北田浦	高下	十本	入川	北立島	北川内	後尾	石花	北花辺	南花辺	種別			計	
													大宇戸	敬	純		
八	七	四	一	七	五	九	七	六	七	六	四	五	一	一	一	一	二
四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四	三	一	五	二	二	八	六	一	四	三	二	二	一	一	一	一	二

内行商人「本村以外」

(A) 呉服太物類 行商人約十名 旭力別 八幡、真野、河原田、沢根、柳川
賣上高年一人最高二千五百円 最低一千円

(B) 其他 賣薬履物野菜魚類等

漁業

(A) 漁業に關する組合

従来數ヶ字合併して設置されたりし上組下組の漁業組合を統一し現在には概ね左記の如くなり、將來益々組合員の利益を増進し漁業に關する共同の施設を為さんとしつゝあり

。名称 高十村漁業組合 役員 理事三名 内組合長一名 互選 監事三名
。総代会 総代は二十四名とし左の各區に於て組合員の互選によるものとす

オ一區 高十、北田野浦、小野見、石名 十名

オニ區 石花、後尾、北川内、北立島、入川 十名

オ三區 南片辺、北片辺 四名

。会員 二百五十名

(B) 戸数

純漁者 なし

(6) 漁業者 一八八名

内譯

南片辺一〇 北片辺一ニ 石花一ニ 後尾一四 北川内二〇
北立島七 入川七 十本一〇 高下二一 北田野四〇
小野見三 石名三ニ

(A) 主要海産物年産額

内訳魚イワシ

五五〇円 サバ 一四〇円 タラ 九〇〇円
サンマ 二五〇円 タヒ 三五〇円 トビウラ 五〇〇円
美シイラ 五〇〇円 其他一〇〇円

小計

四二九〇円

貝類アワビ

一五〇〇円 サザエ 二五〇〇円

小計

四〇〇〇円

藻類アラメ

二三〇〇円 ワカメ 二五〇〇円 ノリ 二〇〇円
テングサ 二〇〇円 エゴ 六〇〇円

小計

五八〇〇円

其他イカ

三〇〇〇円 タコ 二〇〇円 其他 七〇〇円
イワシ油粕 二五〇円

小計

四一五〇円

(三) 販賣方法

品物により一定せず主要産物たるワカメの如き其の六割位は信組佐渡聯合会の手を経て委託販賣をなし残り四割は個人の自由販賣である エゴは多く郡内の仲買人の買める迄でありアラメの如きは郡内は勿論遠く郡外より購入の為仲買人の入り込むありスルメも全様である魚類は多く村内で消費さるゝも其の他露の如きは多量に漁獲されたる時は利根村内消費の途なく直に沖より小型発動機船にて相州に至り魚問屋に持ち込むもの多く為るに海岸にあり乍ら是等の魚を捕る事難し以上要するに仲買人賣であり亦だ出荷統制の域に至らず

(四) 漁獲方法並改善奨励事項

漁獲方法は在来の手押舟による磯漁業であり多少の風浪によつて出漁不能となる状態であり最近小型発動機漁船による沖合漁業者多少あるも将来は益々此の種の船の増加により漁獲高を増加すべきである尚昭和十一年は高千地内に於て村外資本により大謀網の設置あり在来の漁獲方面に一新紀元を劃せり又用網を使用する者僅少にして将来は此の方面にも奨励の手を延ばすべし
往年当地方の特産物たりし鮑の如き漁獲の結果現任に於ては絶滅に類しつゝ、あり此の終に放置せば或は当地方より鮑を獲る事難からん是が為るに近年佐渡郡水産会に於ても対策として禁漁期の延長其の他種々奨励中なるも本村に於ても之

(五) 労働賃金

(1) 自二十才至五十才男女別人口 一七五〇人

男	三	四	九	三	六	五	七	四	七	一	七	五	一	〇	三	四	六	七	〇	一	〇	七	四	五	七	五	一	九	八	七	七
女	四	〇	八	〇	六	七	六	三	七	三	七	四	一	八	五	〇	八	一	一	〇	四	〇	五	九	一	八	八	七	三		
計	七	四	一	七	一	三	一	〇	一	四	一	一	一	八	五	〇	八	一	一	〇	四	〇	五	九	一	八	八	七	三		

大工	最高	一・一〇	最低	〇・八〇	平均	〇・九〇
爪挽	最高	一・二〇	最低	一・〇〇	平均	一・一四
一般男	最高	〇・七五	最低	〇・六〇	平均	〇・六五
一般女	最高	〇・五五	最低	〇・四五	平均	〇・四九

に共鳴するものであり在来の鮑の大き径三寸以上の採取を許したりしが今後は之を径四寸以上に改めんとしつゝ、あり尚又禁漁期は旧来九月十月のニヶ月間なりしが之を九十一の三ヶ月に改め以て鮑の保護を計らんとしつゝ、ありワカメの如きは本村として帯紙を一定せるものを使用させ居るも将来は之を尚一層改善してパラフィン紙に包み広く観光客にも販賣せんと計画中であり尚其の採取高を増加せしめんが為るに毎年定期に磯掃除即ち藻刈を執行してワカメアラメの発生を多からしめんと奨励中なり

鉾山男最高 一・五七 最低 〇・四〇 平均 一・三三
 女 〇・六八 〇・五〇 〇・五四

(四)休業日 (旧暦)
 一月 一日 二日 三日 七日 十五 六日 二十日 廿八日
 二月 十五日
 三月 三日 二十一日
 四月 十日
 五月 五日 農休ミ三日 箇位
 六月 一日
 七月 十五日 十六日
 八月 一日
 九月 一日 稻刈休ミ 三日 箇位
 十月 十一月 十二月 ナシ
 其他 鎮守祭 (新四月十五日) 小学校運動会当日 春秋彼岸中日 龍宮祭

(二)動力工具
 〇 精米機 一 九 糶摺機 一 二 製材機 三

(木) 耕牛馬数

大字	南花辺	北花辺	石花	後尾	川内	立島	入川	千本	下田	浦小	見石	名合	計
牛	四	二	七	九	三	二	八	一	八	三	七	二	六
馬	二	三	三	三	三	一	四	五	一	六	七	四	五

(六) 農繁期の生活状態

雪も消えてそろ／＼草木も芽を吹き出す三月の頃となれば麦の肥直しが始まる。此の時から農民の活動が始まる朝は三時と云へば起き出で老人幼児の朝食の世話をする暇などなく掃除其他晝食の支度は居残つた老人或は子守などの手によつてなされ夕方もおそく迄働く最も忙しい植付けの頃となれば小学校も休みとなるので一家総出の働きぶり 植付け後の草取は女子の手によつてなされる。草取も終へ十月の初旬となればいよ／＼稲刈が始まる学校生徒も登校前に一度は田圃へ出て来る 或部落では牛の番と云つて春秋の忙しい時に学校を休まして山へ牛の番にやる習慣がある 刈入れた稲は朝は早くから夜は電灯の下で次々と手を加へられて十一月の頃には家中俵の山となる 其他豆ひき大根採りと仕事をすまして冬ごもりの支度にかかる

(七) 農閑期の生活状態

田畑の仕事もかたづくとも一家総出でしば取りを始め一ヶ年分も取り込んでし

まふと今度は味噌煮をするこれで大した仕事もないので纏ない炭俵草履草鞋等
 それ／＼の仕事にかかる 若い娘さく達は旧正月前は国仲相川方面へ女中奉公
 に出かけお正月間近になると家へ帰つて来るその間の収入は大ていは娘さんの
 小遣ひに在り そして春山へ出られる様になる迄裁縫其他の修養につとめる
 冬期間に食物は絶食となるが餅は度々食べる

(5) 金融

(1) 村民貸借常習

最近産業組合の発達に伴ひ本村の信用組合を利用する者多くなりたるも大正の
 中頃より昭和の初めにかけての打続く好景気の波に乘り多数の無盡を組織しし
 かも必要以外の巨額なるものを組織し或は田畑山林に替へ或は利潤関係より資
 産不相当なることを認め乍ら振りに加入したるが其後世界的経済界の大変動
 により払込不能となり一方勸業銀行等より低利資金の融通等にて一時を彌縫し
 たるも到底是済の見込つかず最近之がため相当困難を感じつ、あるもの、如し

(2) 金融充実程度 (一信組の部は昭和十一年五月末現在)

大字	額別貸借割合 金口数割合	額別貸借割合 金口数割合	額別貸借割合 金口数割合
南片辺	二三五	八五〇	四一二
北片辺	三四八	一二三五〇	三〇〇九
			二四〇一

石	後	北	北	北	十	高	北	小	石	小
花	尾	川	立	川	本	下	田	野	名	田
二八〇	三二五	内二二	島二九	二五二	一四五	一五五	浦一〇〇	見二〇〇	名二五〇	田三三
六八〇〇	二〇〇〇	一五〇〇	八五〇〇	二八〇〇	一三〇〇	一五五〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一二五〇	三三
六一二四	二九三二八	三〇一三	一四四七	三二九八	五二五	六五四	七四八	五三三	九七	二九〇八
八九五	七九七九	五一五六	三三〇九	四〇六八	一四八一	五三〇四	三二二〇	一二六九	三五五三	

(4) 信用組合

沿革 大正十二年十月廿九日設立認可 最初上高十信用組合と称し後尾に於て
 開設す下高十信用組合は石名に於て開設す
 上の区域 南片辺、北片辺、石花、後尾、北川内、北立島、入川、十本
 下の区域 高下、北田野、小野見、石名、小田(外海前)
 昭和六年六月上下両組合を合併し高十信用組合と称し全材以て一丸とな

本組合員七十一人 事業として信用購買販賣利用の四方面に活躍せり
 事業の成績左の如し (昭和十一年十二月末現在)

◎信用部	預金総額	二八、一五二、五六
	定期貯金	五〇、〇四六、八四
	組合員貯金	二六、七四二、八二
	家族貯金	一一、一四五、五七
	団体貯金	一一、〇八八、一七
	貸金	六二、四六八、四〇
◎購買部	内産業用品	二七、二五六、六三
	經濟用品	一四、四三八、八七
◎販賣部	米	四八、四四七、五九
	木炭	一、六九八、三四
	ワカメ	六九〇、九三
	其他	三六、四八
◎信用部	収入	七八五、七九一
	支費	三七一、〇五九
	償却支出	三〇、二〇、四八
	本部会計	一一、二六、八四
	繰入	
◎購買部	収入	七、八五七、九一
	支費	三七一、〇五九
	償却支出	三〇、二〇、四八
	本部会計	一一、二六、八四
	繰入	
◎販賣部	収入	七、八五七、九一
	支費	三七一、〇五九
	償却支出	三〇、二〇、四八
	本部会計	一一、二六、八四
	繰入	

(三) 無盡の現状

大字別口	敬	金	額
南片辺	三		五六〇円
北片辺	八	年三八九四円	米四口 三石六斗
石花	七		年五四七〇円
後尾	九		〃 二九四〇円
北川内	一		〃 一九五四円
北立島	一		年八六一〇円掛込
入川	三	一林	〃 六〇〇〇円掛込
十本	一	一三	〃 二六〇〇円掛込
高下	一	一七	年三三〇円掛込
田浦	三	四棟	年七四〇円掛込 米四斗掛五斗五分掛二
小野見	一	五〇棟	二、七〇〇円
石名	七		三〇円掛一、一〇円掛二、二〇円掛一、米四斗八斗二、年五分八

(四) 負債整理軽減計画

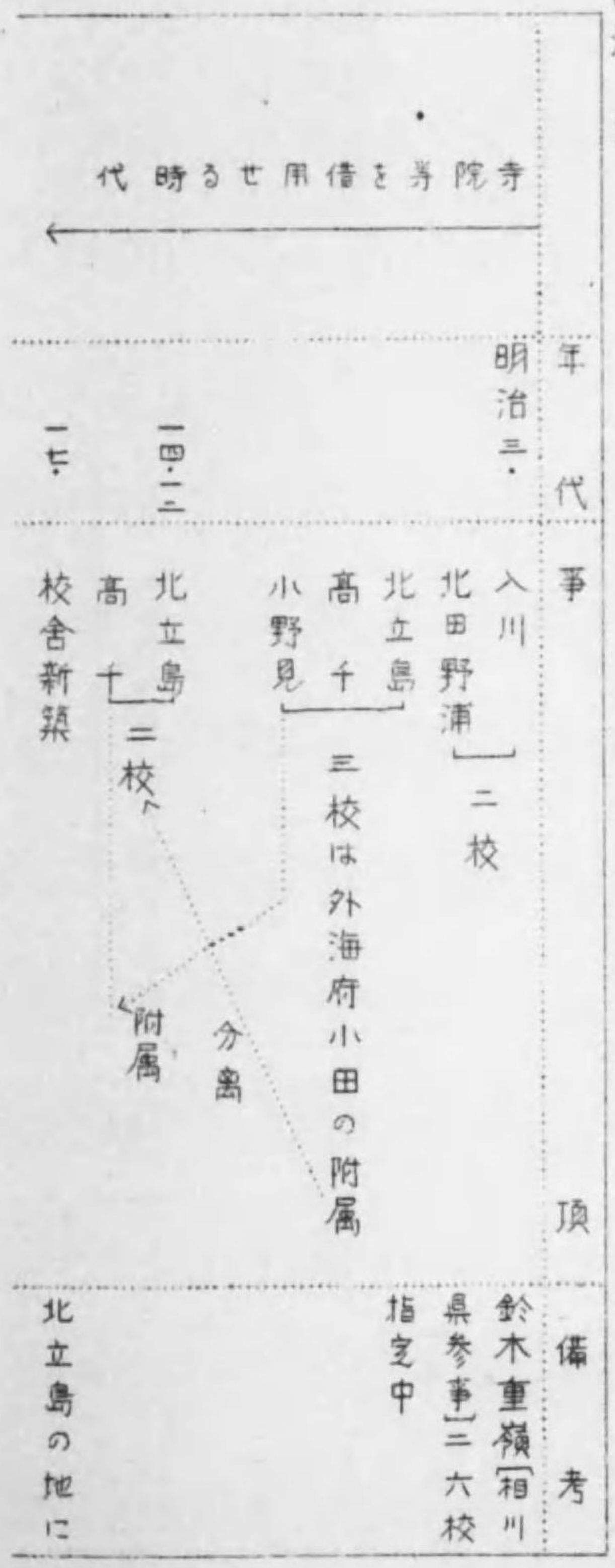
本材には未だ負債整理組合の設置を見ず、此の組合を設置して負債を整理軽減し、以て善境を打開することは極めて急務なりと信ず

〔N〕高千鉸山の恩恵

本高千鉸山の従業員は大部分は本村人にして其数常務員約二百五十人臨時を合せて三百を算す之并従業員は月収約一万円内外ならんこの現金収得こそは本材の逼迫せる金融界を幾分にも潤す唯一の收得なりん

〔M〕教育

(1) 小学校



北立島尋常小学校	北立島尋常小学校	北立島尋常小学校	北立島尋常小学校	北立島尋常小学校	北立島尋常小学校	北立島尋常小学校	北立島尋常小学校	北立島尋常小学校	北立島尋常小学校
片北	片北	片北	片北	片北	片北	片北	片北	片北	片北
高千	高千	高千	高千	高千	高千	高千	高千	高千	高千
高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科
高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科
高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科
高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科
高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科
高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科
高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科
高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科	高等科

鈴木重嶺(箱川 県参事)二六校 指定中

北片辺校は石花校の移転に就しもの修業ニヶ年

独立

二二・五 簡易科小学校設立
北立島校は分場となる
二四・四 北立島尋常小学と改称
三五・四 北片辺 尋常小学校新設
二五・八 北立島校に高等科併置
三七・七 高等科修業年限を四ヶ年とす
三九・ 小野見分場を石名に移転す
四五・四 石名尋常小学校と改称

代時校学小等高等尋常十高	場分川入
(場分川入)	代時校
	代時
	代時校学小等高等尋常十高

大正四・四入川分場一北立島校ニ設立	入川地域に の地に鉦山坑 天の子弟收容
五・五高等科修業年限三ヶ年とす	入川地域に 主殿校舎北立島校 主三ヶ高等校 南分場北立島校 北分場石名校
一・三高等科尋常高等小学校設立	
南分場一石名一学級 北分場一石名一学級 入川分場一学級	
一四・一才一期及才二期工事の一部竣工	
二四・四新校舎に收容	
昭和三・〇才二期工事完成	
四・三北分教場二学級に増加	
七・三高等科一学級増加	
七・三屋内体操場増築完成	

回 教員数

計	女	男	正
一五	五	一〇	高正
三	一	二	尋正
一八	六	一二	計

内 事務委員

昭和一〇・一	水谷佐平	名
九・三	土屋宗一	
九・四	中山幸作	
九・四	石塚直吉	
九・四	影一	

(三) 学校経費 (最近五ヶ年)

年度	昭和七年	八年	九年	十年	十一年
教員俸給	一六四〇	一六四〇	一六四〇	一六四〇	一六七六
雑給	七四八	七七一	七六六	七七八	七九九
備品費	五四〇	九四三	九二四	九三〇	九九〇
修繕費	二二六	二九四	二一〇	二〇〇	一七〇
其他	五七五	六八六	六九〇	八一六	八一〇
合計	一三七二九	一四三三四	一四二三〇	一四三六四	一四〇四五
児童一人当り	一六・六〇	一七・八七	一七・三七	一七・八二	一七・五一
児童一人当り	〇・二五	〇・二五	〇・二五	〇・二五	〇・二五

(1)卒業児童数

年	十		九		八		七		計
	女	男	女	男	女	男	女	男	
計	六三	二八九	六三	二八八	六二	二八五	六二	二八四	二四七
一	六	三	六	三	六	三	六	三	六
二	七	三	七	三	七	三	七	三	七
三	八	四	八	四	八	四	八	四	八
四	九	五	九	五	九	五	九	五	九
五	一〇	六	一〇	六	一〇	六	一〇	六	一〇
六	一一	七	一一	七	一一	七	一一	七	一一
七	一二	八	一二	八	一二	八	一二	八	一二
八	一三	九	一三	九	一三	九	一三	九	一三
九	一四	一〇	一四	一〇	一四	一〇	一四	一〇	一四
一〇	一五	一一	一五	一一	一五	一一	一五	一一	一五
計	一〇六	四五	一〇六	四五	一〇六	四五	一〇六	四五	一〇六

(2)児童出席百分比

年	十		九		八		七		計
	女	男	女	男	女	男	女	男	
計	九四	九四	九六	九六	九六	九六	九六	九六	九六
一	四	四	六	六	六	六	六	六	六
二	一	一	七	七	七	七	七	七	七
三	四	四	八	八	八	八	八	八	八
四	一	一	九	九	九	九	九	九	九
五	四	四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
六	一	一	一	一	一	一	一	一	一
七	四	四	二	二	二	二	二	二	二
八	一	一	三	三	三	三	三	三	三
九	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一〇	一	一	五	五	五	五	五	五	五
計	九三	九三	九六	九六	九六	九六	九六	九六	九六

(3)卒業児童数

年	十		九		八		七		計
	女	男	女	男	女	男	女	男	
計	一〇六	四五	一〇六	四五	一〇六	四五	一〇六	四五	一〇六
一	六	三	六	三	六	三	六	三	六
二	七	三	七	三	七	三	七	三	七
三	八	四	八	四	八	四	八	四	八
四	九	五	九	五	九	五	九	五	九
五	一〇	六	一〇	六	一〇	六	一〇	六	一〇
六	一一	七	一一	七	一一	七	一一	七	一一
七	一二	八	一二	八	一二	八	一二	八	一二
八	一三	九	一三	九	一三	九	一三	九	一三
九	一四	一〇	一四	一〇	一四	一〇	一四	一〇	一四
一〇	一五	一一	一五	一一	一五	一一	一五	一一	一五
計	一〇六	四五	一〇六	四五	一〇六	四五	一〇六	四五	一〇六

(4)学級数

合	高等科		常科					尋常科	本	校	分	場	北	分	場	入	川	分	場	計	
	計	三男	一三女	一	六男	六女	五男														五女
計	一	二	八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	二	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
七	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一七	四	一三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

(5)児童数

(6)児童出席百分比

明歴代字校長

校名	任命年月氏	名本籍	校名	任命年月氏	名本籍
北立	明治二七・六	菊池秀藏	高学	大正二・四	谷口三吉
立	三五・二	伊藤五作	校昭	和二・三	中村初太郎
島	二八・三	久保里了太郎	時	四・三	松田清作
校	三九・二	土屋 誠	代	六・三	村岡龍太郎
時	大正四・三	丸田登平	高	七・三	近藤金五郎
代	八・三	谷口三吉	小	八・三	島村 了二
		相川町		一一・三	土屋宗一
		相川町			吉井村

(2) 青年学校

(1) 沿革の概要

創立 大正十五年七月一日従来の高十農業補習学校に青年訓練所を充用し青年訓練所を充用高十農業補習学校と改称し更に昭和十一年七月一日青年学校令により現在の高十青年学校となり現在に至る

(回) 校舎建築 高十尋常高等小学校内に併設

(イ) 職員数 校長兼助教諭一 助教諭九 指導員二 講師一

(三) 生徒数

学年	普通科計		研究科計		合計
	本	計	本	計	
一	八	九	二	二	一一
二	二	二	四	四	六
三	一	一	五	五	六
四	一	一	三	三	四
五	一	一	二	二	三
六	一	一	一	一	二
七	一	一	一	一	二
八	一	一	一	一	二
九	一	一	一	一	二
十	一	一	一	一	二
十一	一	一	一	一	二
十二	一	一	一	一	二
十三	一	一	一	一	二
十四	一	一	一	一	二
十五	一	一	一	一	二
十六	一	一	一	一	二
十七	一	一	一	一	二
十八	一	一	一	一	二
十九	一	一	一	一	二
二十	一	一	一	一	二
二十一年	一	一	一	一	二
合計	一八	一九	二二	二二	四一

(四) 年令別生徒数

年令	十三年以上	十四年	十五年	十六年	十七年	十八年	十九年	二十年	二十一年	合計
生徒数	八	二	四	四	三	三	三	三	三	二二

(五) 職業別生徒数

職業	農	工	商	鉦	木産	其他	計
生徒数	一八八	二八	四	一			二二一

(六) 青年團員たる生徒数

普通科	研究科	計
一	二	三
二	四	六
三	六	九
四	八	一二
五	一〇	一五
六	一二	一八
七	一四	二二
八	一六	二八
九	一八	三六
十	二〇	四四
十一	二二	五二
十二	二四	六〇
十三	二六	六八
十四	二八	七六
十五	三〇	八四
十六	三二	九二
十七	三四	一〇〇
十八	三六	一〇八
十九	三八	一一六
二十	四〇	一二四
二十一年	四二	一三二
合計	一	二六

份教授

通年制
自四月一日至十月三十一日
毎月曜日晝間
自十一月一日至二月三十一日
毎月曜日晝間及火水木金曜
夜間授業

(丙) 一年教授及訓練時数(昭和十年度)

研究科	三三	三五	七〇	一〇二	二五五
本科	三三	三六	四七	四	二七三
普通科	三三	三一	八七	四八	二七三
計					

(丁) 一年の教授及訓練日数(昭和十年度)

普通科	六三
本科	六三
研究科	六三

(戊) 生徒出席率

月	普通科	本科	研究科	平均
四月	八・三三	一・五八	四・一一	二・〇九
五月	一・一一	一・四一	一・五二	一・二六
六月	〇	一・三五	九	六・八〇
七月	一・九四	四・一三	七・七	一・六六
八月	二・九六	三・一一	二・四〇	二・一〇
九月	二・四〇	七・一九	二・三	二・一六
十月	〇	業期	休校	
十一月	二・〇〇	〇	三七	五・二八
十二月	二・〇〇	〇	三七	五・二八
平均	一・六〇	八・一一	八・〇八	一・七〇

(イ) 実習地 ナシ

(ロ) 教練用具
輕銃圓銃ニ 三八式歩兵銃一 擬銃ニ〇 兼合付帶劍ニ六 飯盒三〇
背囊ニ七 水筒三一 指揮刀ニ 双眼鏡一 劍道具一五

(カ) 経費
給料三二四円 雑給五五円 備品九〇円 消耗三〇円 印刷一五
通信運搬五円 電灯四三円 雑一五円 計五七七円

(コ) 特別施設

- ・生徒の志氣鼓舞の爲劍道具十五組あり
- ・課外運動として卓球庭球野球あり
- ・郡内中等学校青年学校聯合演習に参加
- ・本年四月青年学校後援会を組織す
- ・七月校旗樹立

(3) 上級学校入学状況(最近十一年)

性	年	男子	女子	計
〇	三	三	〇	三
〇	四	一	〇	一
〇	五	〇	〇	〇
〇	六	三	〇	三
〇	七	二	〇	二
〇	八	〇	〇	〇
〇	九	〇	〇	〇
〇	十	二	〇	二
〇	十一	一	〇	一
〇	十二	一	〇	一
〇	計	一五	〇	一五

四 社事兵事
兵事之部

(1) 帝國在郷軍人会高千村分会

(1) 沿革 明治三十三年佐渡縣在郷軍人と一團とせる郡兵事講話会組織高千村支部と置くが兵軍曹兼治松太郎支部長となる 明治三十九年六月兵事講話会變更任郷軍人團と稱す 明治四十三年十一月三日帝國在郷軍人会創立となり其本部を東京に置き支部を各縣隊区に置き從來の在郷軍人團の組織を變更し帝口在郷軍人会高千村分会と改稱し分会規約を制定す 明治四十四年二月十日兼治松太郎分会長となる

(2) 目的及事業

・分会は本会の実施機關にして聖旨を奉体して軍人精神を鍛練し軍人能力を増進するを以て本旨とし進て社会の公益を図り風教を振作し恒に國家の干城國民の中堅たるの實を挙ぐるを以て目的とす
・分会は石の目的を達成する為左の事業を行ふ 但し分会の目的に適合する他の事業を實施することあるものとす

- A. 勅諭勅語詔書の奉読式四六節及廉ある宮中の式典当日に於ける逸拝式
B. 軍人精神の鍛練軍事學術の研究及演習並に体育

C. 過去戦役の紀念役役死亡者及公務に起因する死亡者祭典の補助並に其遺族公傷病者の優遇

D. 会員志召準備の整頓召集事務の補助並に徵兵検査箇所及呼の際に於ける承会者指導の協力

E. 現役兵及補充兵として入營するもの及補充兵にして未だ入營せざる者の軍事教育並に入營(團)者の送迎

F. 青年團員及少年團員誘掖指導に關する協力

G. 風教改善に關する協力社会公益事業の補助公安の維持並に非常時に於ける救護事業の援助

H. 会員一致和諧を基礎とする社会の融和協調助成並に会員相互の扶助

I. 必要に應じ会員及其家族並に現役者一轉休者は会員中に含む一の家族扶助会員及現役者一轉休者一の葬儀会葬並に其家族の慰籍

J. 精神修養軍事及一般智識の増進並に団体全員の指導連絡の爲講演会開催本会並に支部発行雜誌圖書普及並に会報等の発行

分会は分会の事業と其目的又は種族を同うする事業を行ふものある時は成るべく之と協同し之を補助するものとす

組織

(4) 分会は高千村在住の会員並に在籍出寄者中入会希望の会員を以て組織し左の系統を以て上級団体と連絡す

本会——才ニ師管聯合支部——新発田支部——在渡郡聯合支部——高千村分会

(3) 分会は左の十二ヶ班を以て組織し各班は更に会員十五名乃至二十名を以て二

区分し各組は組長の姓を冠し兼何班何組と称す

才一班南片辺 才ニ班北片辺 才三班石花 才四班後尾 才五班北川内

才六班北立島 才七班八川 才八班十木 才九班高下 才十班北田浦

才十一班小野見 才十二班石心

(二) 会 員

(1) 分会員は正会員特別会員名誉会員の三種とし其の區別左の如し 但し特別会員及名誉会員は他の本人の承諾を得て之を推薦するものとす

正会員

○ 予備役後備役退役將校同相当官準士官予備役後備役下士兵卒帰休兵補充兵海軍予備員才一〇民兵役にあるもの及六週間現役を終り才二〇民兵役にあるもの前項に依り会員たりしものにして其後退き尚引続き正会員たることを希望するもの

特別会員

○ 本村出身現役將校同相当官並に本村所在学校在職現役將校にして分会評議員に於て推薦したる者

名誉会員

○ 分会を退きたる者の中功績顯著にして分会評議員に於て推薦したる者

○ 在郷軍人に非ずして特に分会に助を与へ又は功勞ありたるもの若くは協力を受くべき者にして分会評議員に於て推薦したる者

各班には会員名簿を備へ常に組と連絡して会員の異動を明かにし必要の都度分会に報告するものとす

(例) 役員

分会長一名 副会長一名

分会評議員会に於て分会内の正会員中より推薦し本会総裁囑託す

理事二名 監事二名

分会評議員会に於て分会内の正会員及名誉会員中より推薦し分会長囑託す

評議員十二名

分会総会に於て分会の正会員中より推薦す

班長十二名 組長若干名

各班組内の正会員に於て当該正会員中より推薦し分会評議員の承認を経て分会

長之と囑託す

(内) 会員数 二六〇名

将校 後備役二名予備役一名 下士 予備役二名後備役一名

兵 後備役七八名予備役三六名補充兵役一三一名

海軍 後備役三名予備役二名兵四名

(外) 分会基本金 六七〇円 (組合貯金とす)

(2) 戦病没者

○高千村大字石花ハ。ハ。ハ。地

陸軍歩兵軍曹 勲七等

法名 大徳院忠徳忠居士

池田 苗藏
明治十一年二月七日生

養父 明治三十一年十二月一日歩兵トシテオ三十聯隊へ入隊、三十三年十二月一日伍長ニ任官、三十四年十一月三十日現役満期当日解除予備役編入

、三十七年二月十日歩兵オ三十聯隊オニ中隊へ入隊、十二月廿四日征露

ノ為屯営出発、明治廿七年三月廿一日宇品港出帆、全月二十六日韓口鎮南浦

上陸、以下戦地勤務中、コト軍隊手帳オニ依ルモ記載ナキ為不詳ナルモ現

存者実兄池田徳藏ノ口傳ニヨレバ左ノ如シ

明治三十七年五月一日九連城攻撃大縁江渡渉ノ際敵弾ニ斃レ全月二十九日

野戦病院ニテ死亡全日軍曹ニ任官

○高千村大字小野見一五八番地 陸軍歩兵伍長 勲八等功七級

法名 旅順院忠堂報口居士

石塚 國藏
明治十四年十月十日生

養父 明治廿四年十二月一日徴兵トシテ札幌歩兵オ二十五聯隊入隊、三十六年

十二月三十日満期除隊、明治三十七年八月十五日充員召集ヲ命ゼラレ札幌

歩兵オ二十五聯隊へ入隊、廿七年十月廿一日大坂着全十一月十三日大坂

灣出帆全月十八日清口盛京省タルニ上陸、廿七年十二月五日於清口盛京

省ニ。三高地攻撃ノ際胸部貫通銃創ヲ受ケ戦死ス

○高千村大字北田野浦一六一番地 陸軍憲兵上等兵

法名

近藤 平次郎
明治二十五年七月二十七日生

養父 故陸軍憲兵上等兵近藤平次郎君

大正元年十二月一日徴兵トシテ歩兵オ十六聯隊オニ中隊ニ入隊、三年十

一月十七日憲兵上等兵全日村松憲兵分隊へ編入ヲ命ゼラレ全月二十日着任

大正四年十二月十二日青島上陸全日坊子憲兵分隊へ編入ヲ被命、大正五年

二月二十四日任地ニテ勤務中死ス

○高千村大字北田野浦一四九六番地 陸軍歩兵一等兵

法名

中野 仙次郎
明治二年四月八日生

養父 必定院盡忠意照明居士

軍隊手帳紛失シ不詳、但シ本人ノ受テタル聯隊射撃賞状其ノ他ノ書類ニ依

レバ明治二十五年十二月一日新発田オ十六聯隊ニ入隊シタルコト及ビ清口金

洲ニ於テ日清戦役ノ際病死シタルコト確實ナリ

○高千村大字八川ニ。五ニ地

陸軍歩兵一等兵

計良太 作
明治八年九月八日生

法心 盡口院義光忠報居士

履厂 軍隊手帳紛失ノ為不詳 但シ明治二十七八年日清戦役ノ際清口方面ヨリ更ニ台湾守備才ニ聯隊ニ編入シ明治三十年八月十四日於台北病死シタルコト確實ナリ

○高千村大字石名六四地

陸軍歩兵一等兵 勲八等

渡辺ハ太郎
明治十六年八月二日生

法名 忠邦院盡務道正居士

履厂 明治二十一年十二月一日才ニ師團砲兵才ニ聯隊才五中隊編入 明治二十三年九月三十日過買ニヨリ除隊ヲ命ゼラル 明治二十八年九月六日召集全九月十六日補充トシテ仙台出發全月二十三日清口大連上陸全二十四日甜所ニ於テ才ニ師團廠管視察員補充トシテ編入 明治三十八年十月四日清口大連灣出發全十三日台湾東港ニ上陸全十八日鳳山ニ向ケ前進全十九日赤山庄ニ着全地ニ屯任ス全三十一日台南ニ向ケ前進十一月二日台南ニ着全地ニ屯

○高千村大字石花七八三三

陸軍歩兵一等兵

永野市太郎
明治元年二月二十日生

法名 忠邦院盡務道正居士

任ス

○高千村大字八川ニ。○ニ地

陸軍歩兵一等兵

本岡兼次郎
明治二年十月二日生

法名 秋運院義勇報口居士

履厂 軍隊手帳紛失ノ為不詳ナルモ日清戦役出征中病死シタルコトハ確實ナリ

○高千村大字高千一三ニ五地辰、一陸軍輜重兵ニ等兵勲八等山 本三 次郎

法名 忠輪院覚念道孝居士

履厂 軍隊手帳紛失セル為戦地ニ於ケル正確ナル勤務經過ヲ知ルコトヲ得ザルモ遺族ノ口伝ニ依レバ左ノ如シ

明治三十七年八月仙台輜重兵才ニ大隊へ入隊現役ニケ月満期右一時帰郷程ナク全年十一月頃日露戦争ノ為召集ラサレ戦地ニ勤務中病ニカカリ鉄嶺病院ニ入院シ全地ニテ死亡シ輜重輪卒ヨリ輸重兵ニ進級勲八等ニ授セラレタルモノナリトイフ

○高千村大字北片辺九六地

陸軍輜重兵持務兵勲八等本 岡佐太郎
明治四年二月十五日生

法名 報口院忠誠順阿居士

履厂 明治二十五年八月一日輜重輪卒トシテ輜重兵才ニ大隊才ニ中隊ニ入隊全年十一月三十日在營満期退營 明治二十七年九月勤員ニ依リ十月四日才ニ師團才一野戦病院へ入隊全年十月三十一日仙台発十一月三日広島着二十八年

備考	胸圍		體重		身長		昭和十年度 受検人員三九 <small>(七條志願者除く)</small>	昭和十一年度 受検人員四〇(全上)
	平均	総計	平均	総計	平均	総計		
胸圍ノミ測ラザル人員ハ	〇八五九	二六六四〇米	五四四九ニ	二一七六三	一五九七	六二二六四米	一六〇五	六四一八三米
				二一七六三			一六〇五	六四一八三米
				五四四九ニ			一六〇五	六四一八三米
				三一二九九			一六〇五	六四一八三米
				〇八二九			一六〇五	六四一八三米

寄附地検査	適令前志願	現役軍人	学生	七條志願	徵集延期者
三	一	一	一	一	二

種別	昭和十年度	昭和十一年度
甲種	一四	一
乙種	五	五
丙種	一六	一四

一月十一日宇品港出帆全十四日清口盛京省大連湾着十九日追碇泊二十日山
 東省榮城湾上陸全年二月二日東洋ニ於テ野戦病院開設業務ニ服ス全十九日
 閉院進軍全二十日威海衛上船全十二日盛京省旅順口着全二十三日全省双台
 嶺着全三月四日双台嶺舍營病院開院ニ付業務ニ從事ス明治二十八年七月四
 日鳳凰城ノ舍營病院ハ入院ノ処七月二十四日大孤山兵站病院ニ向ケ転送全
 地病死

高千村六字小野見一ニ七地 陸軍歩兵二等兵
 大谷清藏
 明治三十年八月五日生

法名 輝口院義報勇盛居士
 履厂 軍隊手標紛失ニヨリ不明 但シ明治三十六年十二月一日補充兵トシテ新発
 田歩兵才十六隊隊ハ入隊シ後病ヲ併テ全地衛戍病院ニテ死セス

因疾 兵 該当者無し

附徴兵検査結果表

北立島	歩兵上等兵	勲八等	兼次郎	入川	砲兵上等兵	勲八等	立野
入川	一等兵	池田吉藏	北田浦	兼重特務兵	一等兵	山田兼藏	立野
	二等兵	池田元吉				村端口藏	
	兼重特務兵	池田孫太				中田小之吉	
		池野香吉				榎坂長太郎	
高十	歩兵上等兵	石塚龜藏				金沢口藏	
	一等兵	中山内次郎				高野太中	
		中沢尋藏				高野太中	
		東右政太郎				高野太中	
		山尾立吉				高野太中	
		永樂永吉	小野見			高野太中	
		川部由之助	石名			高野太中	
		池野鶴松				高野太中	
	海軍等水兵	安田伊三郎				高野太中	
	工兵上等兵	洪田松太郎				高野太中	
	砲兵上等兵	池田太郎				高野太中	
	兼重特務兵	太平兵次				高野太中	

高等官同待遇者

陸軍工兵少尉

陸軍歩兵少尉

陸軍砲兵少尉

神社及寺院之部

(I) 神社

(1) 白山神社

伊弉册命

大正十二年二月九日新潟縣ヨリ

元祿寺社帳ノ字ニ慶長五子平ノ創設トアリ

本殿拝殿 境内

八幡若宮社

大宇北片辺字前平一。三三地

大鶴鷄命

未詳

本殿拜殿 境内

羽黒神社

倉橋龜命配祀大山昨命

社掌 兼補

明山本丸

例祭日 旧九月十七日

社掌 兼補

明山本丸

例祭日 旧九月十七日

社掌 兼補

明山本丸

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

正八位

橋本太郎

水谷次郎

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

橋本太郎

水谷次郎

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

橋本太郎

水谷次郎

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

橋本太郎

水谷次郎

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

藤谷美登利

田緒 元祿寺社帳ノ写ナルモノニ元祿元辰年ノ創設トアリ
 社殿 本殿拝殿 境内 四二坪 氏子 八〇戸 例祭日 旧九月十五日
 同村社 素盞鳴神社 大字石花字セドセハニ地
 祭神 素盞鳴命 社掌 兼補 明山 本丸
 由緒 安政元年英悦ノ災ニ罹リ神社悉ク焼失シ未詳
 同村社 本殿拝殿 境内 三九坪 氏子 六一戸 例祭日 旧九月十八日
 祭神 石動神社 大字後尾一ニ四一地
 社掌 兼補 永樂 磯次
 由緒 天正七年創立ト伝フ火能屋社ト称セシライツノ頃カ現称号ニ改ム
 社殿 本殿拝殿 境内 九三坪 氏子 七一戸 例祭日 四月十二日
 田地 八畝歩 基本金 二十四一六正十一一年三月末現在一
 同村社 熊野神社 大字北川内字前平九四四地
 祭神 柳御氣野命 社掌 兼補 岩本 幾藏
 由緒 創立年月日不詳当村産土神タリ室永元年九月延享三年九月享和元年六月
 天保十年度ニ再建明治七年村社ニ列ス從前白山權現又ハ十二社ト称シ未
 ル同年八月改称ス
 社殿 本殿幣殿拝殿 境内 八九坪 氏子 五七戸 例祭日 旧三月十日

山林 八畝二十六歩 基本金六百円(公債証券六枚)
 (f) 村社 熊野神社 大字北立島四一八地
 祭神 柳御氣野命 社掌 兼補 明山 本丸
 由緒 不詳
 社殿 本殿拝殿 境内一〇七坪 氏子 七五戸 例祭日 旧九月十五日
 (g) 村社 宝生神社 大字八川八七ニ地
 祭神 木花南耶姬命 社掌 兼補 明山 本丸
 由緒 寛政四年創立大字八川産土神トシテ祭リ明治七年村社ニ列セラレ
 社殿 本殿拝殿 境内 八一坪 氏子 八六戸 例祭日 旧八月十日
 (h) 村社 八幡神社 大字高十袋二〇四一地
 祭神 譽田別命 社掌 菊地 竹治
 由緒 不詳
 社殿 本殿 境内 三二坪 氏子 不詳 例祭日 旧八月十四日
 (i) 村社 熊野神社 大字高千九六ニ地
 祭神 伊弉册尊 社掌 兼補 永樂 磯次
 由緒 神社法ニ永録四年ノ創設トアリ
 社殿 本殿拝殿 境内 三五坪 氏子 五六戸 例祭日 旧八月十四日

(四) 村社 諏訪神社

祭神 健御名方命 大字高千七三六地

由緒 承久三年七月、創設

社殿 本殿拜殿

境内一ニ九坪 氏子 六三戸 例祭日 旧七月廿六日

(五) 村社 御禮智神社

祭神 常立尊 大字北田野浦字前平一六五地、子地

由緒 神社誌焼失、為不詳

社殿 本殿幣殿拜殿

境内四五坪 氏子一〇二戸 例祭日 旧七月二十日

(六) 村社 伊弉册尊

祭神 伊弉册尊 大字北田野浦八野二一〇三地

由緒 天正二年八月創立大和口吉野郡丹生川上神社ノ靈ヲ当村社人片岡儀左エ

門ナル者北田野浦三十戸ノ氏神トシテ勧請シ其後元禄七年佐渡奉行所ヨ

リ米四斗五升宛御朱印ヲ賜ハリシト云フ境内ハ從前官有ノ地明治元年ニ

返上企九年ニ無代價ニテ御下渡ノ許可ヲ受ケ明治十五年村社ニ列セラ

社殿 本殿拜殿 境内 七三坪 氏子三〇戸 例祭日 旧九月二十日

基本金 四一四八三圓 [但公債証書一枚外郵便貯金]

(七) 村社 熊野神社

祭神 天神七代地神五代の神 社掌 兼補 永樂 磯 次

由緒 延徳元年平トアリ寛正二年創立

社殿 本殿

境内 七八坪 氏子 四〇戸 例祭日 旧八月六日

(八) 村社 熊野神社

祭神 天神七代地神五代の神 社掌 兼補 永樂 磯 次

由緒 不詳

社殿 本殿拜殿

境内 六〇坪 氏子 六八戸 例祭日 旧八月十日

山林 五畝歩

基本財産 二五〇圓 [大正十一年三月末現在]

(九) 村社 北野神社

祭神 菅原道真 社掌 永樂 磯 次

由緒 不詳

(一〇) 寺院及其他

(1) 正福寺 大字南片辺一ニ地 住職 近藤 宣海

本尊 大日如來 宗派 新義真言宗智山派

由緒 当寺ノ元祖ハ大日堂ヲリシト当寺創立年代ハ次ノ如ク見ユ

一 佐脇雜木郡南片辺村真言家正福寺文祿四、永樂基当年ヨリ九十六年ニ

相成候 以上 真光寺門徒 南片辺村正福寺 印

元禄五年壬申七月十日

又過去帖ニ依レバ寛保元年辛酉歲當時住職快安代ニ造立セラレタリト當時ハ元ニ宮村真光寺(布山)ノ末寺タリシモノガ現在ニテハ総本山京都ノ智積院遺承ノモノトナリタリ 明治三十九年頃当地方ニ寺院合併問題起リ危ク水上坊ニ合併セラレントセシモ當時住職中川文秀ノ尽力ニ依リ寺ノ基本既進ヲ慕キ本山へ申請本山ヨリ正福寺ハ有財産ナレバ決シテ合併スルニ不及トノ力強キ承認ヲ受ケソノ危機ヲ免レテ今日ニ至ル寺院合併ハソノ當時一村ニ一寺或ハ一字ニ一ヶ寺ヲ置クモノトシテ寺有財産ノ多少ニ依リ小ナルモノハ大ナルモノニ合併サストノ主旨ノ下ニ叫バレタモノト聞ク

檀家 七五 境内一三五坪 建物本堂三八五坪庫裡三七二五坪

田 一ニ反三一一步 畑 〇三ニ九歩 山林 二一反二ニ〇歩

原野 〇五〇一步 住職 監物 弘順

(四)

水上坊 大字南片辺一ニ六地 本尊 不動明王 宗派 新義真言宗智山派

由緒 當時開基大同三子年元祖弘長創立応永五寅年二月九日本堂及ヒ庫裡并

地蔵堂ハ七五坪ニシテ八〇坪ニ至ル者全十五坪ニテ八日本堂建立時僧柘儀師

檀家 二〇〇 境内一〇〇坪 建物本堂六三坪庫裡二八坪

地蔵寺 大字入川一九一一步 住職 近藤 範 祐

本尊 胎藏界大日如來 前立不動尊 殿立藥師如來十一面觀世音

宗派 新義真言宗智山派

由緒 神護景雲二年和州菅原寺行基菩薩ノ直作延命地蔵尊「立像〇尺二寸」並ニ殿立神迦羅童子制吒迦童子「作者全上立像各三尺五寸」右ノ本尊トシテ延文元年甲申延命山地蔵寺ヲ創立ス「岡基盛傳阿闍梨」降ツテ万治二年年鏡護口家ノ為時ノ住持快仁阿闍梨地蔵法ヲ修シテ靈驗有リ依テ當口主ヨリ田地ニ八反餘年其除前ヲ賜ル明和四年年智城法印寄附ニテ地蔵尊大日如來ヲ本尊トシテ別ニ一寺ヲ建立修法殿トナシ地蔵堂ト号シ現在ニ至ル「地蔵堂南口大面興行四向」

檀家 一六五 境内四八八坪 建物本堂五五坪庫裡三八坪五玄關七坪七

田 一〇反三一九歩 畑 八畝二九歩 山林 一三反六〇七歩

原野 一反九畝七歩

藥泉寺 大字高十二〇四二地

住職 朝山 本成

一〇八

本尊 乘師如承十二神將 宗派 新義真言宗智山派

由緒 本尊乘師如承十二神將日若月若ノ十五尊ノ本儀ハ天平六甲戌ノ年行基ノ御作ト伝ヘラルルモ桓川期ノ作ラシイ至徳元年三月八日漁夫ノ網ニカカツテ海中ヨリ出テ明徳二年夏入崎法二十奉ノ塔婆ヲ立テ、此ノ秘仏ヲ請シ請願ノ法ヲ修ス此ノ年ヨリ下八川邑ヲ改メテ千本邑ト云フ下ツテ応永二十二年小院ヲ改メテ乘泉寺トナリ匠王山ト号ス今ヨリ四百年余リ前ナリ〔乘泉寺説像營寺ニヨル〕

檀家 三五 境内ニ三五坪 建物 本堂三五坪半、金堂一ニ坪半、庫裡二四坪半

山林一反五ニハ歩 原野ニ反ニ該一ニ歩 畑〇七一五歩

西方寺 大字北田野浦一五六九地 住職 加藤源範

本尊 大日如來 宗派 新義真言宗豊山派
由緒 享正年中ノ開基ト口傳ニアレドモ其實不詳明治二年中庚寺被仰出シ際當時住職飯原同十四年五月中復旧再建ノ出願同十五年五月中許下今日ニ至ル

檀家 八八 境内三九一坪 建物 本堂五六坪、庫裡四〇坪
空物 八祖大師願地、八幅對、田地七反八一ニ歩 山林一反五〇ニ歩

(N) 清水寺 大字石名一八五地 住職 山口智海

本尊 金剛界大日如來 宗派 新義真言宗智山派

由緒 厂史ノ都名勝古蹟の中檀持山(三八頁)清水寺(三〇頁)参照
檀家 一五〇 境内三五九坪 建物 本堂五六坪、庫裡三六坪半
空物 古鐸(弘法大師唐土ヨリ伝承 彈正上人作出山釈迦佛
水喰上人作佛像敬体)

田 一六反三一歩 畑 〇四一八歩 山林 六〇反〇一七歩
原野 一八反六〇八歩 墓地 〇二四歩

(H) 其の他

阿彌陀堂 大字北地辺

地藏堂 石花

阿彌陀堂 後尾一ニ九四地

本尊阿彌陀尊 宗派 真言 堂守本固兼藏 境内五ニ坪 建物ニ三坪

由緒 阿彌陀堂境内ニ七間除堂守左工門四郎

石ハ雜太郎後尾村阿彌陀堂永正十七庚辰年開基左工門四郎先祖ニ御座候

檀表 七〇

- 阿弥陀堂 大字北川内
 - 地藏堂 北立島
 - 観音堂 入川
 - 不動堂 高干
 - 観音堂 高干
 - 十五堂 北田野浦
 - 阿弥陀堂 北田野浦
- 本尊阿弥陀如未 由緒 同字西方寺ノ奥ノ院タリ
備考 右之中堂石のみは材料なく不詳

⑤記念碑「高干忠魂碑」

(1)建設許可申請 大正十一年八月八日、全上許可 大正十一年九月六日

(2)位置 高干村大字北田野浦入野神社境内

(3)着工及竣工 大正十一年九月六日ヨリ向フ一ヶ月間

(4)被建設者及其の功勞 別項兵事之部戦病歿者「九四頁」に同じ

(6)例祭

毎年旧七月十七日を以て忠魂祭式典を挙行して忠魂を慰霊し当日の午後は余興として大角力を催す

④官公署及諸団体

(1)官公署

(1)役場 大字北立島に在リ

●組織 村長一 助役一 収入役一 書記五

●事務 庶務 会計 社寺 会議 土木 戸籍 兵事 衛生 財務 土地

統計 学事 社会 勸業其他

○子弟

〔歳入の部〕

財産より生ずる収入

使用料子收料

交付金

〔歳出の部〕

經常部

会議費

役場費

小学校費

青年学校費

納税奨励費

臨時部

建築費

材税

□庫補助金

□庫補助金

基本財産造成費

交付金 雑支出

諸税費

子備費

学事諸費

伝染病予防費

勸業費

統計費

公債費

寄附金

◎村会議員数及其他 (昭和十一年九月十五日現在)
村会議員数 一ニ 全上及県會議員選挙有権者 一一〇四
衆議院議員選挙有権者 一一一五

◎高千尋常高等小学校 教育の部「八〇頁」参照

◎郵便局 通信の部「二三頁ニ五頁」参照

◎駐在所 大字北立島 駐在巡查一 管区一相川警察署 受持一南片辺一高千

◎困果有林事務所 大字入川 梶枝子一

(2) 諸団体

(1) 教育会

◎高千村教育会は明治四十年七月創設
目的 教育に関する事項の考究と普及

◎役員 任期二ヶ年 会長一名 副会長一名 幹事二名 評議員二四名
但し評議員中十二名は毎年度の各字区長に囑託す

◎事務所 高千小学校内
◎会員 正会員一材内世帯主全部——会費は年五匁宛とす
特別会員 教職員僧侶各字重立——会費は年二十匁宛とす

◎毎年天長節の佳き日をトし総会を開き幹部会評議員会は臨時開くものとす

◎総会に於ては会務会計報告議事講演等を行ふ
◎本会は左の事業を行ふ

◎名士の講話 善行者の表彰 補習教育の奨励 風紀の改善 生活の改良
◎本年度事業の主なるもの 名勝旧蹟案内標並に道しるべ建設

◎本会は郡教育会と連絡をとり毎年負擔金八円を納む
◎名勝絵葉書発行

(2) 報復会

◎高千村報復会は昭和六年十一月鉦山長橋本松太郎氏の主唱により創設されしものなり

◎報復会は知恩報復の精神に基き教育勅語の御聖旨に従ひ会員が甲合せて無
一ツ宛善い等の実行を重ねる会たり

◎会員は鉦山能業員及各村民を以て組織し石花より石名に至る各字に別れ会費
は徴集せず

◎例会は毎月一回開き聯合総会は毎年一回明治節の佳き日をトし開くものとす
◎行事 一同敬礼 君が代合唱 最敬礼 勅語奉読 最敬礼 開会の辞

◎実行問題協議 会員所感談 講師の講話 勅語斉唱 一同敬礼
等にて一回約二時間を要し開会閉会共時間勵行のこと

○本会は会長を置かず臨時座長を推挙することあるべし
 ○役員 商機員若干名―重要事項に対し意見提出又は幹事の諮問に応ず
 幹事 若干名―会務の処理
 ○現在に於ては並山從業員が主体なれども將來は全村民之に加はり益々發展せ
 んことを望むものなり

青年團

(四) 大正四年二月設立 本村居住青年を以て組織し事務所を高千小学校内に置く
 (五) 同年十月以上二十歳以上の男子入会の義務あるものとなり昭和十一年度現に
 に於ける團員數約二百名なり
 (六) 役員 團長一副團長一幹事五〔庶務、會計、體育、社會、修養〕任期ニケ年
 (七) 各大字に支部を設け支部長は支部に於ける一切の事務を処理し兼而て支部を
 代表する
 (八) 毎年度始に予備者を作製し之によりて講演、學術補習、體力増進に關する事業を
 行ふ
 (九) 経費は團員の勤勞によるを本體とす

昭和十年度	歳入	二四二円	歳出	二四二円
十年度	々	二九七々	々	二九七々

事業

○郡弁論會選手派遣 ○郡水泳大會選手派遣
 ○陸上運動會開催 ○産業視察隊派遣

○現役共慰問 ○團報発行
 ○名工講演會 ○圖書購入 其の他
 (十) 總會毎年二月中に兩度庶務會計報告、役員選挙、徑費並に事業に關する決議其の
 他を行ふ

(十一) 郡青年團と連絡し總會の選挙により代議員一名を出すものとす
 但し自分の同團長之を兼任す

女子青年團

(一) 昭和二年六月二十七日高千村婦人會として發会せられ昭和八年七月二十二日
 高千村女子青年團と改称す
 (二) 組織 團長一副團長一幹事一庶務會計各二 評議員一二〔各支部一名宛〕
 團員一五八〔十五才以上二十五才以下〕
 (三) 目的 忠孝の本義を体し智徳を幽養し体力の増進をはかり以て女子たるの本
 分を全ふするの素養を得しむ
 (四) 事業。講習會 年中兩散期を設け料理作法裁縫等
 ○講話會 農事其の他名士の講演

- 運動会 年一回村民運動会に参加して行ふ
- 視察旅行 郡婦人会総会には各支部より二名以上出席せしめ兼ねて参る
- 其の他の視察をこせる
- 其の他敬老会 平時災害遭過者の慰問等

消防組

(内) 本村は従来より私設高千村消防組の設置はあつたが交通の難所なる處、浦上、ンネルも昭和九年四月で廃止し警察署管内の連絡も自由に交通上支障なく、に皇太子殿下御降誕記念事業として昭和九年七月廿七日の認可に依り公設高千村消防組となる

(外) 名称 高千村消防組

人員	三八五	内訳	組頭一	部頭兼小頭一	二	小頭一	二	消防手	三六〇
才一部	(南片辺)	部頭兼小頭一	小頭一	消防手	三〇				
才二部	(北片辺)				三〇				
才三部	(石花)				三〇				
才四部	(後尾)				三〇				
才五部	(北川内)				三〇				
才六部	(北立島)				三〇				

才七部	(入川)				三〇				
才八部	(十本)				三〇				
才九部	(高下)				三〇				
才十部	(北田浦)				三〇				
才十一部	(小野見)				三〇				
才十二部	(石名)				三〇				

(外) 消防組に対する給与員並諸手当

- 組頭部頭小頭には甲種の中帽、衣巻、脚絆靴袴防火帽外套及指揮旗提灯を給す
- 消防手には乙種の中法被服掛股引帶頭巾を給す
- 年手当 組頭五円部頭兼小頭二円小頭一円消防手三〇円
- 出場手当 火災又は水防災害の場合 組頭一回一円

- 警戒の場合 小頭兼部頭一回五〇円
- 訓練及演習の場合 小頭一回五〇円
- 死傷手当 死一弔祭料五円一扶助料は之を給せず
- 事業 傷一扶助料として十円以内
- 定期演習毎月一回 臨時演習一春秋

少年団

本村に於ける少年團は私設にして其の組織は各字別に團長一副團長一團員三
 以上高三返とてある 其の主なる仕事として 神社掃除一月の一日 道路掃
 除一冬に在れば雪かきを盛に行ふ 其他朝一定の場所集合し列をなして登行
 すると又土曜の晩にはおさうひ会と名ふものを設け各先團長の家或は青年会
 堂等に集り学科復習をなす等其々活動発展し其の成績をあげてゐる

内 治
 (1) 歴代村長

氏名	生年	就職年月日	退職年月日
立野吉太郎	安政	二年九月十二日	明治三十四年十一月一日
石田守吉	〃	二年八月廿六日	三十五年二月廿八日
池田実	明治	三年十月三日	三十七年十月二十日
水谷佐平	〃	四年二月九日	四十年二月十九日
服部孫次	文久	元年一月五日	四十年四月廿九日
立野吉太郎	安政	二年九月十二日	四十五年三月十二日
梶井五郎平	明治	八年四月一日	大正三年八月二十日
山本安太郎	〃	五年四月十六日	大正四年四月廿四日
池野栄藏	安政	四年六月六日	大正六年六月十三日

(2) 選挙の狀態

有権者教授	票數	投票權數	選挙年月日
青藤佐太郎	安政四年十月十九日	大正九年七月十九日	大正十三年四月十五日
中山幸作	明治十四年一月十九日	〃	十三年五月八日
立野茂利	〃 廿四年三月廿二日	昭和三年五月八日	昭和三年五月七日
藤谷善藏	文久三年四月十一日	〃	七年五月八日
水谷佐平	明治四年二月九日	〃	十年十一月一日

(3) 納税狀態

村税	縣稅	額徵	額歩	合
一四三・一七	一〇・二〇	一・二九	九〇・四〇	
五二・二〇	二・二八	五二・二〇	九〇・七〇	

(4) 基本財産

山林 一三七六・五
 原野 一三五六・二
 潘池 一一七・九

墓地 六六ニ〇 公債 三、〇〇〇円 貯金二八五一円二ニ
建物 役場 七九坪ニ五 学校 本校 三四一坪一八

南方場 一七二。
北方場 九二。

(九) 高千鉦山

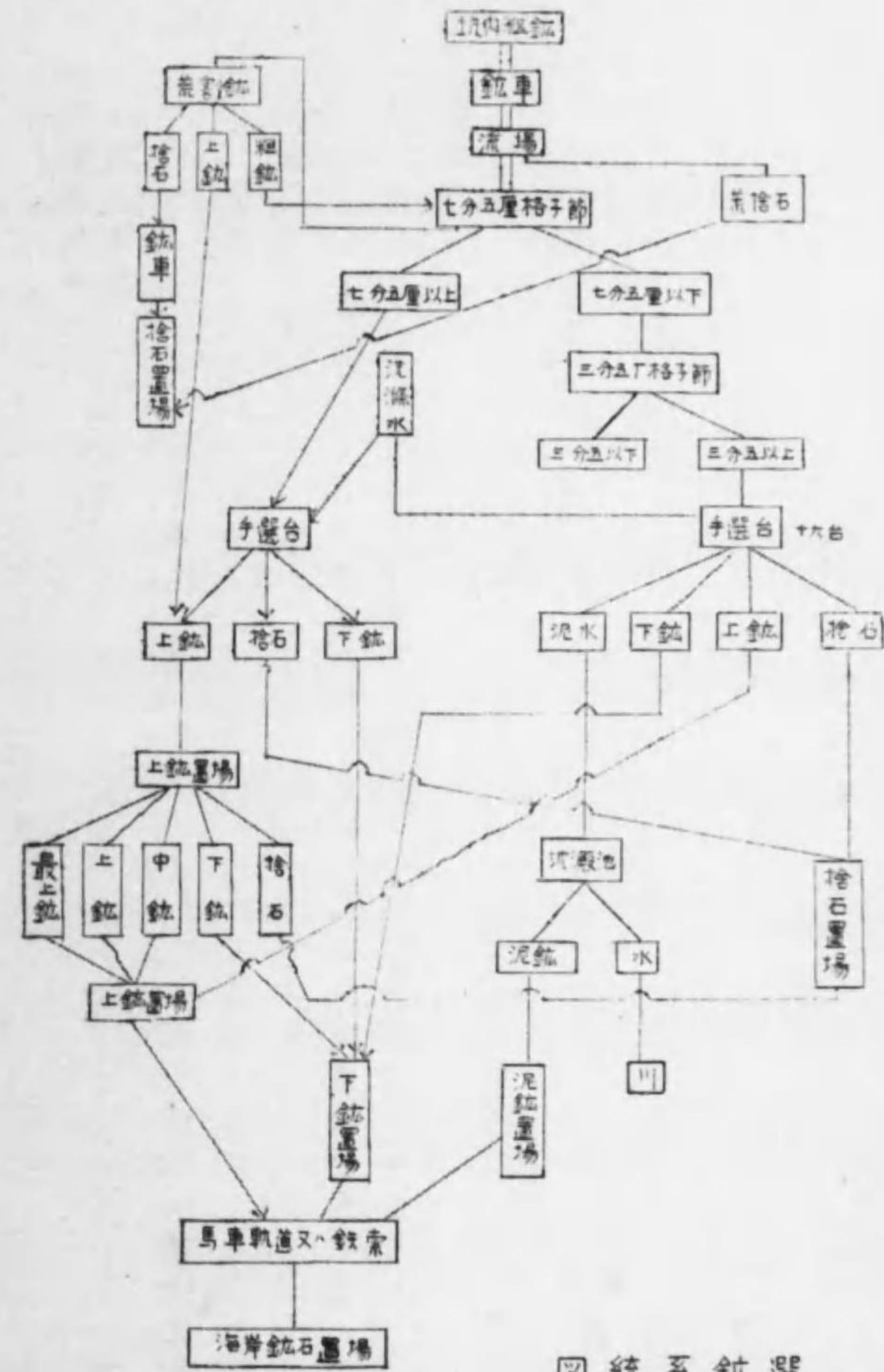
(1) 鉦区

鉦区は高千田野浦小野見真峯後尾の六鉦区を合して四百九万一千八百九十九坪に
併、浦鉦区を合して高千鉦山とす

(2) 沿革

当鉦山は開山不明なれども点在する旧坑より察するに往年相川鉦山の隆盛なりし
当時より採鉦せしものにして鉛山に於ては製煉せし跡を見る 明治廿九年十一月
御料局より三菱合名会社に松下となり廿九年五月より立島坑を移き全四十四年十
月八川坑を買収し採鉦をなし四十五年五月赤岩脈の富鉦帯を発見し漸時事業を拡
張し大正三年單線鉄索六千九百三十四呎を架し專用道路四軒米突の同馬車鉄道の
開設をなし大正十一年一月より手堀並に機械掘法を併用し鉦夫住宅選鉦場機械工
場等を増築し七十五馬力の発電機を使用せり 大正十二年には桜沢に自動鉄索を
架し大に発展し十三年には八川坑に西部富鉦帯を発見し更に発展して此の年より

鉦石は相川のみならず香川県香川郡直島村の直島製錬所其他水島四坂島等へ送鉦
することにたりたり 大正十四年には火力発電をなし捲揚排水等に使用し下部へ
向ひ発展に着手す 大正十五年には八川ニ番坑を開坑し桜沢上一番坑を開坑す昭
和二年には三菱佐渡健康保険組合を組織す 昭和三年八川三番坑南坑機械場を鉄
骨コンクリート建に改築 昭和四年八川立島の南坑を貫通し茲に二軒に及ぶ長き
坑道を完成せり全十一月末には四百馬力の水力発電所を完了し水路の延長三四六
九米七一鉄管の長一八八米一ニ落差一ニ四米三上家一棟住宅二棟倉庫三棟を増
築せり 昭和五年五月馬力捲揚機二十五馬力捲揚機を新設す 昭和六年八川四番
坑五番坑を南坑し陸路三鉄索に電灯並電力を使用す八川海岸に石垣を作り鉦石置
場を増築せり全年十一月三日較復会を組織し全村的に普及せし今日の如くなる
昭和七年麗水会を協和会と改称す八川坑に於ては六番坑七番坑を開坑し立島坑に
は一番坑を開坑し陸路捲揚機を据付けたり百馬力捲揚機を据付け岩機台数を増加
す全年七月全村並に外海府の一部へ電力を供給し村は一変して電灯の光に浴す
昭和八年立島ニ番坑三番坑白滝三番坑を開坑し全年音楽部を開設ガラスバンドを
組織す昭和九年八川上六番坑立島四番坑水の元上一番坑を開坑す 全年戸地発電
所と高千発電所と陸路電路を新設せり昭和十年は立島選鉦場を増築し八川事務所
を改築す昭和十一年には協和会館を建て一般の修養慰安娛樂に資す斯の如くして



選鉱系統圖

(二) 運搬

坑内運搬は半吨鉱車にて人力にて軌道に依り運搬す〔六尺レール〕

(三) 排水

排水は自然排水を主とし入川七番坑四番坑にはポンプを使用して本坑道へ排水し立島に於ては四番坑にポンプを置き排水す総馬力九十五馬力鉄管四吋のもの 総延長三百三十米なり最大出水一分四十分二十個なり

(四) 通風

自然通風にして坑道押作業には圧搾空気を使用して動力と兼ね通風す鉄管延長五三六〇米にして四吋三吋二吋を使用す

(五) 点灯

本坑道の主なる部分と空坑並にポンプ室には電灯を用ひ工場にアセチレン灯を使用す

(六) 産出量

最近五ヶ年間の鉱量左の如し〔但し五月ヨリ翌年四月迄トス〕

年	深祖	鉦	量積	鉦	量合	金合	銀
昭和六年	一三九九	九二	七五四	九七一	〇〇六五	一五九	一五
七年	一四九二	一九	八一五	七七一	六八七	四九	八一
八年	一六二七	七八	八一七	四八	五四七	一六	九六
九年	一四〇八	八二	八一四	四七	七〇四	六八	四二
十年	一八五七	一〇	三〇二	八	六七	九六	〇六

(6) 動力並に機械
 当鉦山の動力並に機械美左の如し
 当鉦山に於ては製煉所なき為全部本山相川又は正島製煉所に送鉦し製煉す時には
 他会社へ賣鉦なすことあり

名	称馬	力台数記	事	名	称馬	力台数記	事
ベルトン水車	四〇〇	一發電用		電動機			
送風機	五	一鍛冶用					
空圧圧搾機	一〇〇	一鑿岩機使用ノ為					
發電機	三二五 KVA	一水力發電機使用					

電	動	機	名	称馬	力台数記	事
捲揚機	一	一旋盤用				
空気捲揚機	二五〇	一鉄索用				
	五	一運搬用				
			鑿岩機			
			ポンプ			
			消火ポンプ			

(7) 諸設備
 ● 電話 構内電話には鉦業用特設電話六個 交換機一個 坑内保安電話九つ
 又保安電話六台 携帯用電話三台 合計電話二十四個を以て通信を行
 他に市内電話一個加入し居れり

● 分柙場熔鉦炉一台 分金炉一台 破鉦機一台 天秤二台を使用す
 ● 枝橋 立島海岸にコンクリトを以て作る
 ● 消防 消防隊を編成し手動ポンプを有す
 ● 学校 分柙場を設け山中住居者の児童教育に充つ
 ● 病院 開業医に委嘱し重態の者は相川鉦山病院に送りて收容す

(8) 従業員
 職員四 月給労働者一 鉦夫頭五 事務員七 支柱夫一八 大工二 鍛冶四
 坑夫四一 運転夫一五 鑿岩夫二六 運搬夫五五 選鉦夫三二 雜夫七
 電氣夫八 坑外雜夫二二 以上合計 二四六

(9) 建築物 此の外臨時夫約十五名あり

種別	事務所	場倉	庫俣	樂部	職員住宅	鉦夫住宅
戸数及棟数	四	一二三	三	三(四戸)	八(四三戸)	
坪数	八五五・二五七・八四四・四一〇・三二四・八二五・八四九・三二九・七三					
合計、棟数	八一	總坪数	一四三・三三三・三三坪			

(10) 附帯事業

- (1) 精米業 従業員に支給するたの精米を行ふ
- (2) 植林業
- (3) 従業員の修養
 - (A) 改善班 主として生活改善を行ふ 各組六人―四人
 - (B) 協和会 修養並慰安を行ふ講演講習等をなす
 - (C) 報徳会 修養団体なり講演講習等をなす
- (4) 従業員の慰安
 - (A) 音楽部 大会小会出演等をなす〔ガラスバンド、室内楽等〕
 - (B) 座球部 大会小会遊正をなす
 - (C) 野球部 全 右

(11) 其の他

(1) 名勝指定地としての本村

本村の南北をつなぐ海岸一帯は所謂海府海岸と称され吹きすさぶ荒波に削られて巨岩瑤居し男性的壯美をなしてゐる昭和八年文部省へ名勝指定の請願をなして東大名誉教授脇水鉄五郎博士新浮高校徳重教授等の実地調査を経て九年五月小水海岸と共に文部省指定名勝地となつた至る処風光の美を展開し観光の人々を驚歎せしめてゐる

(2) 保健

本村人は一般に保健思想が不立と云はればなるまい伝染病隱匿の弊なども絶無とは云へまい本年(昭和七年)の統計を見るに腸チフス、ダフテリア、ニ四を出してゐる結核患者は其の集産の様には云はれた時代もある現在も此の種の病者が相当多いのであるまいか昭和九年漸く伝染病舎を建設し衛生講話衛生活動写真等に依り村

(2) 卓球部 全 右

(E) 園藝部 品評会等をなす

(F) 演藝部 活動写真芝居浪花節等を行ふ

(G) 慰安部 囲碁将棋等をなす

(H) 戶外運動部 遠足運動会等を行ふ

其 他 疾 患	麻 疹	腸 チ ブ ス	腸 及 神 經 系 結 核	乳 癌 固 有 疾 患	夕 フ テ リ ア	外 傷 死	女 子 生 殖 器 疾 患	下 痢 及 腹 炎	肝 臓 硬 化	肺 炎	腸 結 核	腸 及 腹 膜 結 核	老 衰	腸 炎	氣 管 支 炎	腦 膜 炎
三	三				三			一	一	六	三	四	六	三	二	
三	三				二			二		二			七			

肺 結 核	微 毒	腎 臓 炎	胃 の 疾 患	心 臓 の 疾 患	癌	流 行 性 感 冒
六	一	一	六	二	一	二
三	一	一	五	一	一	一

死亡者調 男五十一 女四十二 内訳左の如し (昭和十一年三月調)

計	女	男
一七七	八六	九一
四八	二二	二六
六二	二一	四一
三三	一〇	二二
計		

高齢者調 (昭和十二年一月調)

民の保健思想を涵養してゐるがまだ、徹底したとは考へられない識者は住宅の改造寢室の改善栄養食の研究等を叫んでゐるが一般には少しも反響がないのではないか次に本村の高齢者表と死亡者表とを掲げて見よう

終

